

**近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内
瓜生堂遺跡他 5 遺跡第1次発掘調査報告書**

昭和50年 3 月31日

財団法人 大阪文化財センター

河内平野は、氾濫と開拓を繰り返しながら今日の姿を形成してきました。

しかしながら近世以前の開拓、開発行為は、現在の様な一部特定の人々の為になされたのではなく、そこに住む全ての人々の為に彼ら全体の想意と工夫の上に立って行なわれたものであります。したがって彼らの生活をおびやかすものは、現在の様な人工的な公害ではなく、自然そのものだったのです。そこには果てることのない自然との闘いがあった反面、完全な形で自然との調和も存在したのです。

さらに、一方では自然は彼らを苦しめた反面、古代より現代にいたるまで、彼らの生活のありさまを克明に大地に刻みつけて残してくれたのです。

したがって、我々が今、この河内平野を利用しようとする時は、ただ単に目先の経済性や、土木技術におぼれることなく、上述の人々の努力を十分に理解し、彼らの残した遺産の上に、より発展的な形で開発行為を行なわなければなりません。この様な形の開発行為が実施されないときは、必ずや地域住民に、その昔、自然が与えた苦痛よりもさらに強い苦痛を与える結果を生み出すことでしょう。

ここに報告する瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査も、当該遺跡の実態を正確に把握し、基礎資料を整備することを目的としたものであります。

調査期間中、多大の援助を下さった日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所の関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、調査業務に従事された調査関係者諸氏に深く感謝の意を表します。

昭和50年3月

例 言

- 1) 本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施した瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書である。
- 2) 調査に必要とした費用(44,915,000円)は全額日本道路公団が負担した。
- 3) 調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、昭和49年5月1日から昭和49年9月27日迄の間、現地に於ける発掘調査を実施した。

一方、出土遺物の整理は調査と平行して実施し、昭和50年3月までの期間を費やしたが、出土した遺物の量は、当初予想したよりもはるかに多量であり、今回報告するのは、その辺の一部である。

- 4) 現地調査は、調査室長中西靖人の指示のもと、調査主任辻内義浩が担当し、赤木克親、國乗和雄、安井幸雄の諸氏を調査員として、また山崎博、木村宏史、松本実、橘正美の諸君を調査補助員として起用し、積極的な援助を受けた。

一方、出土遺物の整理作業は、調査主任妹尾直子を担当者として、調査補助員若林愛子、作業員中西フキの協力の下に実施した。

- 5) 各トレンチより採集した層位毎の土砂による花粉分析及び環境変化の復元は、広島大学総合科学部助手安田喜憲氏に委託した。
- 6) さらに発掘調査及び遺物整理に関しては瓜生堂遺跡調査会の積極的な協力を得た。なかでも同調査委員会調査主任今村道雄氏、調査員曾我恭子氏並びに松下晴子氏には多大の援助を賜った。記して感謝する。
- 7) 本冊子の執筆は、安田喜憲、辻内義浩、妹尾直子が当たり、全体の監修は中西靖人が行なった。
- 8) 現地調査には、前田建設工業株式会社はじめ、押井工務店、香川建設、宮崎重機の各社の協力を得た。



第1図 調査標識

目次

はしがき

例言

〔Ⅰ〕調査に至る経過	1
〔Ⅱ〕調査の方法	2
〔Ⅲ〕予定路線内に於ける遺跡の概要	3
〔Ⅳ〕遺跡概要一覧表	13
〔Ⅴ〕出土遺物	16
〔Ⅵ〕出土遺物観察結果一覧表	50
〔Ⅶ〕花粉分析等による河内平野の自然環境の変遷	25
— 弥生時代、古墳時代を中心に —	
〔Ⅷ〕おわりに	48
〔Ⅸ〕参考文献一覧表	49

挿図目次

- 第1図 調査標識
- 第2図 鋼矢板打設風景
- 第3図 発掘グリット全景
- 第4図 新家遺跡出土木製品
- 第5図 遺物検出作業風景
- 第6図 西岩田遺跡出土木製品
- 第7図 瓜生堂遺跡出土木製品
- 第8図 佐堂遺跡出土木和銅開珎
- 第9図 若江北遺跡No.2 トレンチ出土土器実測図
- 第10図 佐堂遺跡出土土器実測図
- 第11図 城山遺跡No.2 トレンチ出土土器実測図
- 第12図 河内平野の微地形と弥生時代遺跡の分布
- 第13図 瓜生堂遺跡トレンチ断面図
- 第14図 瓜生堂遺跡30S地区トレンチ断面図
- 第15図 山賀遺跡トレンチ断面図
- 第16図 瓜生堂跡トレンチ断面図
- 第17図 瓜生堂遺跡No.2 トレンチ断面図
- 第18図 ボーリング柱状図
- 第19図 遺跡の層序とボーリング柱状図の比較
- 第20図 河内平野の地質縦断面
- 第21図 縄文海進期の河内平野
- 第22図 弥生時代前、中期の河内平野
- 第23図 弥生時代中期末～弥生時代後期の河内平野
- 第24図 瓜生堂遺跡の花粉ダイアグラム
- 第25図 河内平野に於ける縄文海進期以降の環境変遷図
- 第26図 海水準の変動と堆積物の変化

図版目次

- 図版一 新家遺跡出土遺物
図版二 新家遺跡出土遺物
図版三 巨摩麿寺跡出土遺物
図版四 山賀遺跡出土遺物
図版五 山賀遺跡出土遺物
図版六 近畿自動車道予定路線と遺跡の位置
図版七 新家遺跡、西岩田遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版八 瓜生堂遺跡、巨摩麿寺跡、若江北遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版九 山賀遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版十 友井東遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版十一 佐堂遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版十二 久宝寺遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版十三 亀井遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版十四 城山遺跡、長原遺跡の範囲及び遺物包含層断面図
図版十五 山賀遺跡出土土器実測図
図版十六 山賀遺跡出土土器実測図
図版十七 瓜生堂遺跡出土土器実測図
図版十八 瓜生堂遺跡出土土器実測図
図版十九 瓜生堂遺跡出土土器実測図
図版二十 瓜生堂遺跡出土土器実測図
図版二十一 巨摩麿寺跡出土土器実測図
図版二十二 新家遺跡出土土器実測図

(1)調査に至る経過

日本道路公団大阪建設局が建設を進めている近畿高速自動車道天理～吹田線予定路線内に含まれる遺跡は実に12ヶ所に及ぶ。

これら12ヶ所の遺跡の内、昭和48年度に、財団法人大阪文化財センターは、日本道路公団大阪支社の委託事業として亀井遺跡、久宝寺遺跡、友井東遺跡の3遺跡の第1次発掘調査を実施し、これら各遺跡の範囲、埋没深度、遺構の有無、遺物の量、時代の認知等について明らかにした。(大阪文化財センター調査報告Ⅳ、近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書)

また、大阪市東住吉区長吉長原町、同城山町で実施されている高速電気軌道第2号線建設工事に関して、当センターが実施した試掘調査で、いままで知られていなかった長原遺跡(古墳時代～平安時代)、城山遺跡(弥生時代後期)の2遺跡を発見し、その範囲、埋没深度等を明らかにした(大阪文化財センター調査報告Ⅵ中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告)この両遺跡も近畿自動車道内に含まれるものである。

このようにして、昭和48年度に於いて予定路線の南半部の遺跡の実態がほぼ明らかとなった。

この結果に基づいて日本道路公団は、大阪府教育委員に対して、この南半部の本格調査の実施を依頼したのである。しかしながら、大阪府教育委員会は、調査体制を確立する上に於いて、全体の予定が立たず、経費も算出出来ない現状では調査を実施するのは無理だとして、さらに北半部に含まれる6遺跡の実態の確認が必要であることを主張した。

一方、日本道路公団も、昭和49年度に北半部の調査を実施することは予定していたことであった。

こうして、日本道路公団大阪建設局は、財団法人大阪文化財センターに対して、瓜生堂遺跡他5遺跡の第1次発掘調査を依頼し、昭和49年5月1日付で両者は受委託の契約を締結し、実際の事業に着手したのである。

〔Ⅱ〕調査の方法

現地に於ける調査は近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内に於ける周知された遺跡の推定範囲周辺及び中心部に5m×5m(25㎡)のグリッドを任意に設定し、その内部を上層から順次、層位毎に調査していく方法をとった。

しかしながら、当該調査の対象遺跡は埋没深度が深いことが予想されるとともに、存在する場所が河内平野の低湿泥地の真中であり極めて地盤がわるいことと、両側が大阪中央環状線であることから、湧水及び震動による土砂崩れ等の災害の危険性が極めて強いため鋼矢板で土留をすることにした。

鋼矢板の打設はバイプロハンマーを使用し、すべて地表面より50cm程度頭を残す様にした。

こうして設定したグリッド内部を無遺物層は機械(クラムシェル)で、遺物包含層及び遺構面は人力で掘削を行なった。また掘削に際しては、地層断面実測図及び地層断面写真が得られる様に半分ずつ行なった。

また各グリッドは掘削を開始すると同時に安全柵を設け、危険標識を貼って関係者及び関係者以外の人々の転落事故等の発生防止に努めた。

さらに調査が終了すると同時に、各グリッドは埋戻しを行ない、鋼矢板抜取後はブルドーザによって整地をした。



第3図 発掘グリッド全景



第2図 鉄矢板打設風景

〔Ⅲ〕予定路線内に於ける遺跡の概要

新家遺跡

当該遺跡は、昭和40年に実施された中央環状線建設工事の際、木製の梯子が砂の中から流された状態で発見されたことと、意岐部小学校周辺に弥生時代後期～平安時代にわたる時期の土器片が多数散布していることから、集落遺跡の存在が想定されていたが、遺跡の実態については不明な点が多く、詳細はほとんど把握されていなかった。

今回実施した調査では、この様に不明な遺跡の中へ4ヶ所トレンチを設定し、各トレンチからすべて遺物を検出したが、なかでもNo.2トレンチから出土した須恵器や土師器を多量に含む包含層は、層としての乱れを示さず、また5世紀末の限られた時期の遺物しか包含していないことが明らかとなり、この時期にこのトレンチを中心としたかなり大規模な集落が存在することが判明した。

しかしながら、遺跡の全体像を把握するにはあまりにも調査面積が狭く、中心的な位置及び時期以外には、当該遺跡を理解する手がかりは検出されなかった。



第4図 新家遺跡出土木製品



第5図 遺物検出作業風景

西岩田遺跡

当該遺跡は、中央環状線敷設工事の後の付随工事によって発見された集落遺跡である。

破壊を受けたのは、昭和39年及び昭和45年に実施された下水道工事であり、遺跡の実態を初めて明らかにし得たのは、昭和46年に実施された広域下水道中央南幹線水管渠築造工事に伴う遺跡の調査であった。

この時の所見は、『西岩田遺跡』として中央南幹線内西岩田、瓜生堂遺跡調査会により報告されている。それによると、当該遺跡は古墳時代の初期から奈良時代までの間の人々の生活の舞台であったことが明らかとなり、それらの時代の土器や、木器が多数発見された。また、当時の建造物に付随すると思われる囲いの残欠や、井戸等当時の生活を知る貴重な発見が多かった。さらに古墳時代初期の遺物として発見された庄内式土器と酒津式土器は、それまで不明とされていた当時の畿内と播磨、備前との関係を立証するにたる史料として極めて重要な意味をもつものである。

一方、当該遺跡と周辺の遺跡との関係を検討すれば、瓜生堂以南に存在する遺跡には古墳時代初期の遺構は山賀遺跡の一部まで存在せず、また新家遺跡との間にも時間的前後関係が認められることから、西岩田遺跡の存在は、広い視点に立った遺跡の関係で大きな問題を含んでいると思われる。



第2図 西岩田遺跡出土木製品

今回の調査は、この西岩田遺跡の沿辺部にトレンチを設定したこともあって、上述の様な大きな問題提起をするにたる史料は検出されなかったが、当該遺跡が、意岐部交替点まで遡ることが判明したことに一つの意義を持たせたいと思う。

瓜生堂遺跡

当該遺跡は昭和40年に実施された府営工業用水管敷設工事の際に青銅製利器を含む多量の弥生時代遺物と共に発見され、それまで河内平野の低湿地には考えられなかった一大弥生時代集落として一躍全国的に注目されることとなった。

さらに昭和41年～42年にかけて実施された第2寝屋川改修工事の際、弥生時代前期の遺物を多量に含む包含層が発見され、河内平野に人間が生活を開始した当初から瓜生堂も人間生活の舞台となっていたことが明らかとなり、さらに、中期の遺構として検出された多数の墓地の中に、大規模な木棺があったことから、学問的な諸問題を明らかに出来得る最大級の遺跡として各方面から再度注目されたのである。

こうするうちに昭和46年、広域下水道中央南幹線下水管渠築造工事に伴う遺跡の調査が、瓜生堂遺跡内部で実施されるに及び、集落の北限、西限が明らかとなり、その間発見された各種の遺構、とりわけ方形周溝墓と呼ばれる大規模な墓地は、日本で初めてほぼ当時のままの姿で検出されたこともあって、その意味は重大であり、弥生時代考古学の現在の発展の一翼をになうことになったのである。またさらに、上述の方形周溝墓群に接して検出された多数の土坑墓群は、方形周溝墓との比較において、当時の社会の中での強者と弱者の関係を、単純に表現すれば階層差を現わすものとして大きな意味を持っていることが認められ、弥生時代中期に於ける社会関係を知る上で貴重な資料となったのである。

加えて、昭和47年に行なわれた公共下水道中部第2排水区若江分区下水管渠築造工事に伴う瓜生堂遺跡の調査では、その東



第7図 瓜生堂遺跡出土木製品

限を確認すると共に、それまで検出されていなかった建物の遺構を発見し、瓜生堂遺跡の居住部分と、墓地との関係がしだいに明らかとなってくるにしたがい、さらに詳細に弥生時代中期の瓜生堂の村の姿が明らかにされつつある。

この様に、瓜生堂遺跡については、ここ数年来の学問的にハイレベルな調査が実施されていることによって、河内平野内部に存在する遺跡群の中では、比較的その内容が把握されているとあってよい。

今回実施した調査で設定した2ヶ所のトレンチは、この広大な遺跡の中の点を掘ったにすぎず、その中で上述の成果に加え得る発見は出来なかったが、南側に設定したNo. 8トレンチに於いて検出した弥生時代後期の包含層及び若干の遺構は、中期に一大発展をとげた当該遺跡の人々のその後を知る上で意義深いものであることを記しておきたい。

巨摩鹿寺跡

当該遺跡は、昭和39年実施された主要地方道大阪中央環状線建設工事の際、河内市教育委員会の手で部分的に発掘調査が実施され、多量の屋瓦、須恵器、土師器、陶器、瓦器等が出土し、また基段の存在と、礎石と思われる石材も認められ、この地に平安時代～鎌倉時代にわたる寺院址が存在したことが確認されたが、寺院そのものの規模や、建造物の種類までは明らかにされていなかった。

今回当該遺跡推定範囲内に設定した2ヶ所のトレンチでの調査結果によれば、巨摩寺の基段と考えられる土段を検出したことによって、寺院に関係する建造物の存在が確認されたが、それ以外の詳細については不明な点が多い。

さらに、今回の調査によって大きくクローズアップされる結果として、当該地域が、弥生時代後期の一大集落址であったことである。隣接する瓜生堂遺跡に於ける現在までの調査結果によると、弥生時代後期の集落は、その位置が明らかにはなっておらず、一時は他所への移動説も強かっただけに、瓜生堂周辺に於いて弥生時代後期の遺物包含層及び遺構が検出され、それも集落の中心部的な密な出土状態であることは、当時の河内の低湿地の状態を知る上で極めて

貴重な成果であると言えるものである。

また、弥生時代中期の遺物包含層の検出は、瓜生堂遺跡の不明だった南限が、現在の第2寝屋川まで達していることを示しており、対岸に拡がる山賀遺跡、若江北遺跡との関係に於いて極めて大きな意味を持つものとなった。

以上のことをまとめれば、当巨摩鹿寺跡として今回の調査の対象となった地域は、弥生時代中期～後期にかけては瓜生堂遺跡の南端部とし存在し、時間が経過し、集落の中心部が現在の若江の部落の方へ移動した後、平安～鎌倉時代に巨摩鹿寺が建立されたものと思われる。

若江北遺跡

当該遺跡は、昭和9年に行なわれた旧楠根川の改修工事の際、若江北町、若江西新町で多量の弥生式土器、土師器、須恵器が出土し、当時信行寺の住職であった故巨摩峰春師によって集められていた。1)

このことによってこの付近に弥生時代から歴史時代にかけての遺跡の存在が当時から知られており、若江北遺跡と呼ばれていた。

しかし、これらの遺物の出土地点や、その状況は、調査記録がなく、位置その他も不明な点が多かった。

今回実施した第1次発掘調査に於ける当該遺跡推定範囲内の2ヶ所のトレンチからは、前述のごとく弥生式土器、古式土師器、瓦器等の遺物が検出された。しかし、今回の調査結果から推察するに、当該遺跡は単独の遺跡として推定範囲内に存在するのではなく、府道四条～布施線以南は山賀遺跡、以北は瓜生堂遺跡と考えるのが妥当であろう。

さらに、今回のトレンチの内、No.12トレンチに於いては、楠根川の旧河道の南端部を検出した。このことによってその昔、山賀遺跡と瓜生堂遺跡を画していた川の存在が確認されたのである。

また、No.11トレンチで検出された弥生時代前期の杭列は、先述の楠根川旧河道北部に拡がっていたと思われる瓜生堂遺跡の水田跡の可能性が強い。このような形で瓜生堂遺跡前期の水田が存在するとすれば、当時の瓜生堂の集落は楠根

川田河道に沿って細長く存在したことになり、さらに集落より上流に水田が営まれたことになり、河内平野内の弥生前期の農耕を考える上で重要な意味を持つと思われる。

(注) 瓜生堂遺跡(1971.12) 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会. P2. 萩田, 藤井参照

山賀遺跡

当該遺跡は、昭和46年度に実施された楠根川の改修工事の際、多量の弥生時代前期～古墳時代の遺物を含む包含層が発見され、昭和47年11月から大阪府教育委員会の手で発掘調査が実施された。この調査の結果、楠根川沿岸部に於いては、弥生時代の遺構は検出されず、多量の土器を含む遺物包含層のみが検出され、弥生時代遺跡の沿辺部であることが明らかとなった。さらに、この部分は、古墳時代前期(庄内式土器)から以降の遺構が多数検出され、河内平野中原に位置する当時の集落のあり方に大きな問題をなげかけた。(瓜生堂遺跡調査会主任 今村道雄氏の教示による)

今回、第1次発掘調査として調査した山賀遺跡の5ヶ所のトレンチからは、弥生時代の前期と中期の遺物包含層及び遺構、平安時代から鎌倉時代にかけての中世村落の遺物包含層及び若干の遺構を検出した。しかしながら楠根川沿岸部にて検出された古墳時代から奈良時代にかけての集落は存在せず、同一遺跡の中でも、時期的に集落の中心部が動いていることがまず明らかとなった。この様に時代によって何故に集落の中心が移動するのは、今回の調査では明らかに出来なかったが、今後本格的な調査が実施されれば、明らかになるであろう。

さらに、山賀遺跡の弥生時代については、第1に河内平野の中央部で人々が生活を開始した各遺跡の中でも、今回発見された土器の編年から、最も古い遺跡であることが明らかとなり、奈良県の唐古遺跡の開始期とほとんど同時にこの河内平野の中央部でも水稻農耕を中心とする人間生活が開始されたものと思われる。また、前期及び中期にかけて極めて学問的にも貴重な遺跡であることも明らかとなった。その概略を示せば、今回調査したNo.15トレンチに於ける弥

生時代前期から中期にかけての遺物包含層の層位関係と、それに伴う遺構の性格が、現在まで問題になりながら不明な点が多かった弥生時代の変遷を考える上に極めて重要な意味を持つことである。

たとえば、西日本各地に存在する弥生時代の遺跡で、前期から中期、中期から後期の間に大きな埋没深度の差が認められることが指摘され、自然環境の変化が大きく論じられる中で、その過渡的時期としての第Ⅱ様式を層位的に明らかに出来たこと、さらにこの時期以前の土器の変遷を層位によって明らかに出来る遺跡であることが判明したことである。

一方、当該遺跡とその北側に存在する先述した瓜生堂遺跡との比較検討をすると、弥生時代前期には旧楠根川をはさんで両遺跡は南北に対峙していたことが明らかとなり、山賀遺跡のほうが瓜生堂遺跡より若干早い時期から人々の生活が始まったようである。しかしながら、一度第Ⅱ様式初頭に於ける大きな自然環境の激変によって廃絶した両遺跡は、中期中葉生活を再開するが、その時点ではすでに両遺跡を単独の集落として二分することは出来ないほどに一面に大きな拡がりを示すのである。このことは、両遺跡の関係が如何なるものであったかを考える上でも、またさらに、弥生時代中期に於ける地域的な交渉と、地域社会の確立を考える上でも極めて重要な意味をもち、今後の調査によってさらに綿密に両遺跡の関係を究明することが、河内平野の弥生時代史のみならず、畿内全域あるいは我国古代史の解明に大きな影響を与えるであろうことを記しておきたい。

友井東遺跡

この遺跡は、昭和38年金物団地の工事中に発見された遺跡である。旧大和川が河内平野を北流した河川、恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川のうち、楠根川ぞいに形成された遺跡で工事中に弥生時代後期と古墳時代の遺物が採集されたが、現在まで発掘調査はなされていない。

遺跡の範囲は、No.19とNo.20トレンチの間付近を北限、No.21とNo.22トレンチの間を南限とする。遺構、遺物の認められたトレンチはNo.21No.20トレンチで地表

下1mに古墳時代の遺構面が広がっている。弥生時代の遺物は地表下1.3m付近で2次堆積遺物が所在する。

佐堂遺跡

佐堂の歩道橋と近鉄大阪線の南に設定したNo.23、24トレンチから共に、地表下1.5m前後で平安～鎌倉期、3.5m前後で古墳～奈良期の遺物が出土した。今のところ遺構の存否については確定し得ないが、この遺跡の特徴的な点は地表下3.5mにも及ぶ層に和同開珎をはじめ奈良時代遺物が包含されていることである。No.23とNo.24トレンチの地層状態はまった



第8図 佐堂遺跡出土和銅開珎

たく同じであり、したがって、300m以上にわたって奈良時代遺物が現地表より3.5m下に遺存するような地形が形成されたのは旧大和川の支流長瀬川との関連が考えられる。佐堂より北の友井東では古墳時代遺構面が地表下1.5m、南の久宝寺では弥生時代遺構面が地表下2mで確認されていることを考え合わせ注目される。

久宝寺遺跡

昭和10年に行われた道路工事に際して許麻神社の西方、小字西口及び栗林で弥生式土器、土師器と丸木舟の残片の出土が知られていたが、その後発掘調査は行なわれたことはなく遺跡の実態は不明であった。

今回、金岡跨道橋南端から国鉄関西線までの間、7ヶ所でトレンチを設定したが、全トレンチから遺物が出土し、非常に広範囲にわたる遺跡であることが判明した。金岡跨道橋南端付近に設定したNo.25トレンチでは近世の井戸の他は摩滅した土器片が数点出土しただけであり、この付近が久宝寺遺跡の北限と判断した。7ヶ所の内、最も南に設定したNo.31トレンチでは多量の遺物を出土したので遺跡が国鉄関西線にまで及んでいるのは確実である。

埋没状態を大別すると、水田の床土直下に中世、近世遺跡、地表下1.20m前

後の暗褐色土を遺構面とする古墳時代遺跡、地表下2m前後の青灰色砂層を遺構面とする弥生時代遺跡、更に地表下3m前後の砂層は弥生式土器の包含層となっている。古墳時代遺構の遺存する暗褐色土はほぼ久宝寺全域にわたって認められるが、遺構の存しなかったトレンチもあり、ひとつの集落一村が連続してあったとは考えられない。弥生時代遺構はNo.28トレンチで認めただけである。いずれにしろ時代の異なる遺跡が重なり合い、複雑な様相を呈している。

亀井遺跡

亀井遺跡は昭和43年に平野川の改修工事の際、発見された遺跡で、平野川流域の八尾市亀井町2丁目から大阪市東住吉区長吉出戸町にかけて所在する。平野川は旧大和川が河内平野に流れ込んでいた痕跡を示す河川のひとつであり、この旧大和川が形成した自然堤防上に住居を構え、旧大和川の運んだ肥沃な土壌に水田を営み、生活をなしていた遺跡である。膨大な量の弥生式土器が発見され、その中には摩滅や風化のまったくない多くの完形土器を含むところから、河内の標式ともなる重要な遺跡と考えられ、大阪府教育委員会によって4次にわたる調査が実施されている。

その結果、夥しい量の弥生式土器（Ⅰ様式からⅤ様式まで）は、大和川の洪水によって流出、2次堆積したものと判明し、この2次堆積物の包含層の東限と南限が確認されているが、遺構の所在は不明である。2・3次調査地点の出土遺物は北あるいは北東から南に流出して堆積したものと想定されている。また第4次調査では、遺物が原位置より流出したのが弥生時代後期から6世紀中頃までの間であると考えられている。今回の調査では、基本的には、府教委の調査と同様の状態が認められたのであるが、遺物包含層の北限が判明したこと他に遺物を多量に含む黒色粘土層がなく砂層と暗青灰色土層中に保存状態が良好でなく、摩滅した土器も多いところから、遺物包含層の中心は中央環状線より東側と考えられる。又No.34トレンチの弥生式土器の出土状態は明らかに西から東に流され堆積したことを示しており中央環状線より西側にも遺跡の存在が考えられる。

No.33トレンチの砂層中では少量の遺物が検出されたが、No.32トレンチではまったく遺物は検出されず、No.33トレンチ付近を北限として大差ない。南限は大阪府の調査で確認されている第27トレンチ（府教委調査）と吉中興業の工場を結ぶ線をそのまま西に延長したNo.35トレンチ付近である。出土遺物は古墳時代後期と弥生時代（前・中・後期）に大別され、前者は地下2m前後、後者は地表下3.5m前後の埋没深度を示している。だいたい当遺跡の一般的傾向に該当している。

城山遺跡

No.101～No.109トレンチは、昭和48年から昭和49年にかけて、大阪文化財センターが大阪市交通局の依頼を受けてなした、高速電気軌道第2号線建設地内の試掘調査の際、検出した遺跡である。No.101、102トレンチにおいて弥生時代後期の遺物を検出し、弥生時代遺跡と報告していたものであるが、遺跡範囲の北限が未確定であった。今回の調査で設定したNo.37トレンチとNo.38トレンチの間付近が北限と判明するとともに弥生時代中期の包含層とした黒色有機質土層中より弥生後期及び奈良時代遺物が検出された。

包含層は地表下約3mにあり、長吉遺跡附近を頂点とした微高地から下ってくる洪積粘土の上に砂層があり、その上層に堆積しているものであり、従って遺構が存在する可能性は少ない。

長吉遺跡

城山遺跡と同じく高速電気軌道第2号線建設工事に際し、大阪文化財センターが大阪市交通局の依頼を受けてなした試掘調査の際、確認された遺跡であり、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物を出土する。包含層の確認されたのはNo.112～No.119の各トレンチであり、道路面下1.8m附近に位置し、旧耕土下約50cmで埋没深度は浅い。No.113、114、115トレンチ包含層下の洪積粘土層が微高地状を呈す。粘土層の上に褐色土が堆積し、この褐色土は包含層と無遺物層に分かれ、無遺物層を遺構面とする。しかしこの褐色土の無遺物層は上記のトレンチから北及び南に行くにつれなくなるので、遺構は微高地上に存したようである。

遺構としてはNo.113トレンチで黒色有機土の包含層が褐色土を切り込んだ状態が認められ、住居跡と思われる。しかし全体としては遺物は磨滅した小片がほとんどで、床土と思われる層にも含まれるところから遺構面は後世整地による攪乱を受けたと考えられる。

〔IV〕遺跡概要一覧表

トレンチ番号 (掘番号)	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物	遺構	時代	編年	備考
-----------------	-------------	-------------	----	----	----	----	----

新家遺跡 (500m)

No. 1 (新家No.5)							
No. 2 (新家No.3)	-2.10~-2.70	-0.04~-0.74	須恵器、土師器、鉄釵	溝ち込み	古墳時代中期	五〇〇	遺構面に土器が多量に存し、住居跡が予想される。
No. 3 (新家No.2)	-1.30~-1.50	0.72~0.52	須恵器、土師器		古墳~奈良		時期判別不能 遺構の有無も不明
No. 4 (新家No.1)	-1.50~-1.70	1.13~0.93	須恵器、土師器		平安~鎌倉		遺物は小片、遺構は伴わないと思う。
	-2.10~-2.55	0.53~0.08	須恵器、瓦器、瓦、土師器		古墳~奈良		遺構は伴わないであろう。

西岩田遺跡 (300m)

No. 5 (西岩田No.2)							水缸が1片出土した納込入居物
No. 6 (西岩田No.1)	-1.30~-1.50	1.31~1.11	須恵器、土師器	段状の溝ち込み	古墳時代後期	三〇〇	

瓜生堂遺跡 (550m)

No. 7 (瓜生堂No.2)	-0.15~-0.50	2.91~2.16	土師器、須恵器、瓦器	土壇	古墳~平安	五〇〇	
	-2.70~-3.60	0.35~-0.53	水缸 弥生式土器(第3.4様式)	柱穴	弥生中期		遺物多し
No. 8 (瓜生堂No.1)	-0.10~-0.90	3.15~2.35	土師器、須恵器、瓦器	土壇	古墳~平安		
	-1.80~-2.55	1.45~0.70	弥生式土器(第5様式)		弥生後期		磨滅著しい小片
	-2.65~-3.20	0.60~0.05	弥生式土器(第3.4様式)	溝	弥生中期	遺構が重なっている	

巨摩鹿寺遺跡 (230m)

No. 9 (巨摩No.2)	0.00~-0.75	2.91~2.16	瓦器、須恵器、土師器		平安~鎌倉	三〇〇	
	-2.40~-3.40	0.51~-0.48	弥生式土器(第5様式)		弥生後期		
	-3.05~-3.70	-0.13~-0.78	弥生式土器(第5様式)	溝状遺構	弥生後期		川の流路
	-3.70~-4.10	-0.78~-1.18	弥生式土器(第3様式) 石皿、水缸		弥生中期		

トレンチ番号 (田番号)	埋没深さ(G.L.)	埋没深さ(T.P.)	遺物	遺構	時代	範囲	備考
No. 10 (山賀No.1)	-0.40~-0.80	2.40~ 2.00	瓦、瓦葺、須臾器		平安~鎌倉	二三〇m	
	-0.90~-1.30	1.90~ 1.50	土師器	土壇	奈良~平安		
	-2.00~-2.40	0.80~ 0.40	弥生式土器(第3.4様式)		弥生 中期		遺物少ない(流入か?)

若江北遺跡 (350m)

No. 11 (若江北No.2)	-0.15~-0.60	2.80~ 2.35	瓦葺、須臾土器		平安~鎌倉	二五〇m	
	-1.10~-1.30	1.85~ 1.65	弥生式土器(第5様式) 古式土師器	柱穴	弥生~古墳 前期		
	-1.50~-1.65	1.45~ 1.30	弥生式土器(第3.4様式)	柱穴(柱礎残存) 溝状遺構	弥生 中期		
	-3.60~-3.80	-0.64~-0.84		土壇	弥生 前期		土器は出土しないが水田跡の 可能あり
No. 12 (若江北No.1)	-0.10~-0.50	2.50~ 2.09	瓦葺	平安~鎌倉	平安~鎌倉	九八〇m	惣地蔵と砂塔から 少量の出土
	-2.80~-3.40	-0.01~-0.61	弥生式土器(第3.4様式)		弥生 中期		流入遺物か、田植根川

山賀遺跡 (980m)

No. 13 (山賀No.5)	-0.20~-0.60	3.53~ 3.13	瓦葺	溝状遺構 柱穴	平安~鎌倉	九八〇m	
	-1.85~-2.30	1.88~ 1.43	弥生式土器(第3.4様式)	溝状遺構	弥生 中期		
	-3.40~-3.70	0.33~ 0.03	弥生式土器(第3.4様式)		弥生 中期		少量
No. 14 (山賀No.4)	-0.00~-0.40	4.47~ 4.07	瓦葺		平安~鎌倉	九八〇m	後世の整地
	-2.00~-2.60	2.75~ 2.15	弥生式土器(第3.4様式)		弥生 中期		流入遺物か
	-2.90~-3.55	1.85~ 1.20	弥生式土器(第1様式)	溝状遺構	弥生 前期		
No. 15 (山賀No.3)	-0.50~-0.90	3.65~ 3.25	瓦葺		平安~鎌倉	九八〇m	惣地蔵中
	-1.25~-1.40	2.90~ 2.75	弥生式土器(第3.4様式)	溝、土壇、柱穴	弥生 中期		
	-1.55~-2.35	2.60~ 1.80	弥生式土器(第2様式)	土壇	弥生 中期		墓
	-2.35~-2.80	-1.80~ 1.35	弥生式土器(第1.2様式)	溝状遺構	弥生 前期		
No. 16 (山賀No.2)	-2.80~-4.00	1.35~ 1.51	弥生式土器(第1様式) 木器		弥生 前期	九八〇m	
	-0.45~-0.85	4.06~ 3.96	瓦葺、土師器		平安~鎌倉		少量
No. 17 (山賀No.1)	-4.00~-4.50	0.86~ 0.36	弥生式土器(第1様式)		弥生 前期	九八〇m	少量 流入か
	-0.45~-0.90	3.94~ 3.49	瓦葺、土師器		平安~鎌倉		

友井東遺跡 (240m)

No. 18 (友井東No.15)							
No. 19 (友井東No.14)							

トレンチ番号 (掘番号)	埋立深埋(G. L.)	埋立型埋(T. P.)	遺物	遺構	時代	説明	備考
No. 20 (友井東No.12)	-0.90~-1.10	4.27~ 4.07	須恵器、土師器	溝状遺構 柱穴	古墳時代後期	 ・ 四 〇 〇 〇 	流人遺物?
	-1.10~-1.40	4.07~ 3.77	弥生式中・後期				
No. 21 (友井東No.11)	-0.40~-1.20	4.92~ 4.12	須恵器、土師器	溝状遺構 柱穴	古墳時代後期		
No. 22 (友井東No.3)							

佐堂遺跡 (360m)

No. 23 (佐堂No.1)	-1.30~-1.80	6.65~ 6.15	瓦器、須恵器、土師器	溝状遺構	平安~鎌倉	 ・ 三 六 〇 〇 〇 	量は少ない流人遺物か。 瓦器は1片だけである。 流人遺物である。
	-3.30~-3.60	4.60~ 4.35	土師器		古墳~奈良		
No. 24 (佐堂No.2)	-1.10~-1.40	7.58~ 7.20	瓦器		平安~鎌倉		
	-3.30~-3.80	5.32~ 4.82	須恵器、土師器 和同開珎		古墳~奈良		流人遺物か。

久宝寺遺跡 (1,380m)

No. 25 (久宝寺No.17)	-0.70~-1.05		須恵器、土師器、木片	井?	近 畿	 ・ 一 三 八 〇 〇 〇 		
No. 26 (久宝寺No.16)	-0.62~-0.98	7.10~ 6.74	須恵、土師、瓦器 磁器、瓦	溝状	近 畿			
	-0.98~-1.10	6.74~ 6.62	須恵、土師、瓦器、瓦	柱穴 溝状遺構	中 畿			
	-1.10~-1.60	6.62~ 6.12	須恵器、土師器	柱穴 溝状遺構	古 墳			
	-3.00~-4.10	4.72~ 3.62	弥生式土器		弥 生			
No. 27 (久宝寺No.10)	-2.25~-3.25	5.19~ 4.19	弥生、古式土師		弥生~古墳 前期			
No. 28 (久宝寺No.9)	-1.05~-1.15	6.31~ 6.21	須恵器、土師器	柱穴、井?	古 墳			
	-2.00~-2.15	5.36~ 5.21	弥生、古式土師、石銅	柱穴 溝状遺構	弥生~古墳 前期			
No. 29 (久宝寺No.7)	-0.30~-0.52	6.25~ 6.03	須恵、土師	溝状遺構	近 畿			
	-0.52~-0.74	6.03~ 5.81	須恵、土師、瓦	柱穴	古墳~平安			
No. 30 (久宝寺No.5)	-0.45~-0.55	6.10~ 5.65	弥生、須恵、土師	溝状	畿 内			
	-0.95~-1.10	5.65~ 5.50	弥生、土師	柱穴	弥生~古墳			
No. 31 (久宝寺No.18)	-1.65~-2.00	5.97~ 5.52	弥生、土師		弥生後 期			

亀井遺跡 (480m)

No. 32 (亀井No.4)						 ・ 四 八 〇 〇 〇 		
No. 33 (亀井No.3)	-1.90~ 2.80	6.87~ 5.97	須恵器、土師器		奈 良			須恵土器含む
No. 34 (亀井No.2)	-1.70~-1.95	6.91~ 6.76	弥生前中後期		弥 生			

〔V〕出土遺物

新家遺跡

No.1 トレンチでは、3層、6層に遺物を包含している。3層では、須恵器、土師器、6層では瓦、瓦器、黒色土器、須恵器、土師器が出土している。

No.2 トレンチでは、4層、6層に遺物を包含している。4層では、陶器、須恵器、土師器、弥生式土器(後期)、6層では須恵質の埴輪が出土している。

No.3 トレンチでは、6層、8層、12層に遺物を包含している。

6層：大量の須恵器、土師器が出土している。須恵器は、平安学園考古学クラブの「陶邑古窯群」でいう、T.K.23からT.K.47の時期に集中している。〔図版21〕。

坏身、坏蓋、有蓋高坏、無蓋坏、壺、小型壺、有蓋短頸壺、小型短頸壺、甕などがある。なかに口縁径60cmに及ぶ大型の甕がある。外反する口頸部をもち、口縁部端面は外に肥厚し、上下方に拡張する。口縁部下に1条、頸部に2条の突条をめぐらし、突条下に波状文を施す。内面は同心円叩きをすりけた後、刷毛目を、外面は平行叩きを施している。なお特筆すべきは、漢式系土器が一片出土している事である。土師器では、壺、高坏、甕、羽釜、竈などがある。

他に滑石製の紡錘車〔図版2〕が出土している。

8層：木製品(第4図)

12層：木の実

西岩田遺跡

No.1 トレンチでは、3層で須恵器、土師器、No.2 トレンチでは4層上面で須恵器、6層で木製品(第6図)が出土している。

瓜生堂遺跡

No.1 トレンチでは、1～6層、7層、12層、14層、15層に遺物を包含してい

る。

1～6層：1～2層、1～3層、3～6層、5～6層と分けて遺物を取りあげているが、いずれも古墳時代の須恵器、土師器を中心に瓦器、陶器、染め付けなどが混入している。又瓦も若干ある。

7層：古墳時代後期の須恵器、土師器及び瓦を中心に、緑釉、灰釉陶器など。

12層：弥生時代後期を中心に弥生時代中期及び古式土師器を若干含む。なお、頸部に櫛描直線文と具殻条痕を施した珍しい土器がある。小破片で詳細はわからないが、砂粒を多く含み、黄白色を呈する。外面に煤が付着している。

14～5層：大量の弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ様式）の土器が出土している。ここでもⅢ、Ⅳ様式を層位的に把握できない。壺、細頸壺、無頸壺、台付無頸壺、壺用蓋、鉢、台付鉢、把手付小型鉢、高坏、器台、水差、甕、用蓋、甌などがある。器種も文様もNo.2トレンチに比べて多様性に富んでいる。

口縁径7～8cmで、口縁部は短く、水平に近く折れ曲って端部は丸くおわる小型の甕がある。内面はくびれ部下から、横方向にヘラケズリ様の調整を行っている。

他に土製の紡錘車、灰白色を呈すたこつぼがあり、石製品では、石包丁、石鎌がある。又穿穴のある木板、木の実などが出土している。

No.2トレンチでは、3層、4層、16～7層に遺物を包んでいる。

3層：須恵器、土師器及び瓦器。

4層：須恵器、土師器、黒色土器、瓦器及び砥石。

4層下面：須恵器、土師器、及び黒色土器

4層下面遺構No.1：土師器(羽釜)

16～7層：多量の弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ様式）の土器が出土しているが、ここでもⅢ、Ⅳ様式は層位的に把握されない。壺、細頸壺、無頸壺、台付無頸壺、水差、鉢、台付鉢、把手付深鉢、高坏、甕、器台などがある。

壺は、口頸部が漏斗状に開き、口縁端部が下方へ折れまがり、口縁端面及び頸部に麻状文を施すものが多い。口縁端面に刺突文を施すものもある。他に頸部が短くたち、口縁部が水平に近く折れ曲がるもの、外開きの頸部に、さらに曲折して上方に向ってたつ口縁部をもつものなどがある。後者は口縁部下方に1本の凹線をめぐらし、頸部と胴部の境に、指頭圧痕を加えた突帯をもつ乳赤色の軟質の土器である。他に石錘、石包丁、木刃状の木片、朱塗りの木板(7図)、杭などがある。

巨摩鹿寺跡

No.1 トレンチでは、3~4層、5層、6層、11層、13層に遺物が包含されていた。

3~4層：瓦器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器、瓦及び灯明皿が多量に出土している。他に砥石、火消壺型蔵骨器、埴輪及び弥生式土器が少量ある。なお特筆すべきは「瓦質土器」と仮に呼んでいる丸い口縁をもち、口縁直下から横方向に深い叩き目を施す大型で肉厚の土器が出土していることである。これは神戸市でその窯が見つかっており、大山や国府で出土しているものである。

4層1号溝東：陶器、須恵器、土師器及び前述の瓦質土器。

4層下面1号溝：瓦、瓦器、緑釉陶器、須恵器、土師器。

4層2号溝上部：瓦器、須恵器、灯明皿。

4層下腹部2号溝：瓦器、白磁、土師器、灯明皿。

5層：土師器

6層：土師器、弥生式土器。

11層：弥生式土器(後期)

13層：弥生式土器

No.2 トレンチでは、1~2層、3層、13層、14層、16層、17層、19層、24層、25層に遺物を包含している。

1~2層：瓦器、須恵器、土師器、埴輪が出土している。

13層：弥生時代後期の甕、壺、長頸壺。

13～14層：弥生時代後期の壺、長頸壺、甕。

16層：弥生時代後期の短頸壺、甕。

17層：弥生式土器（Ⅲ～Ⅴ様式）〔図版20〕

19層：杭。

21層：弥生式土器。

24層：木板。これは厚さ約1.5cmの板で、残存部分縦34cm、横7.5cmに直径0.5～1.3cmの孔を2孔1対で、縦に3対穿っているものである。

25層：弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ様式）の壺、無頸壺、鉢、甕などが出土している。

壺は、漏斗状に開く口頸部をもち、口縁端部が下方へ折れ曲がるタイプで、口縁端面に麻状文、内面に円形浮文をつけている灰黒色の土器である。鉢は、1つは段状口縁をもち、口縁部端面に波状文、口縁部直下に麻状文を施しており、他は、直口の鉢で、口縁直下に波状文を施こし、波状文の上に円形浮文を貼りつけている。甕は、外面叩き目のあと、ヘラミガキを行ない、内面はヘラケズリを行なっている破片である。他に杭、石鏃、獣骨などを出土している。

若江北遺跡

No.1 トレンチでは、1層、4層、13層、15層に遺物を包含している。1層では瓦器、4層では土師器、13層では弥生式土器及び15層では弥生時代前期の土器が出土している。

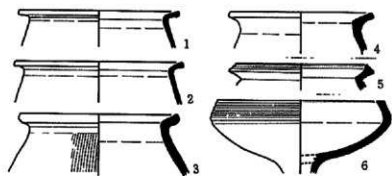
No.2 トレンチでは、1～2層、7層、10層に遺物を包含しており、10層では5ヶのピットと7本の溝が発見されている。

1～2層：瓦、須恵器、土師器。

7層：弥生時代後期から庄内式の壺、甕、高坏など。

10層：弥生時代中期の壺、甕、高坏、無頸壺、蓋など。

第9図—1、2、4、口縁部が斜めに外反し、端部で丸くおわる。口縁径



第9図 若江北遺跡No.2トレンチ出土土器実測図(十)

15cm内外の甕である。口縁部内外面はヨコナデ、くびれ部以下は縦方向にヘラミガキを行っている。4は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面には煤が付着している。2は黒褐色を呈する。いずれも胎土に雲母を含み、焼成は良い。

第9図-5、口縁径約12cmの甕である。口縁部は「く」の字型に外反し、端部は上方にたちあがる。口縁端部に2本の凹縁がめぐる。淡い茶褐色を呈し、外面に煤が付着している。

胎土に1mm程度の砂粒及び雲母を含む、や、軟質の土器である。

PitNo.1：弥生時代Ⅳ様式の高坏（第9図-6）

腰に鈍い稜線をもって内湾気味にたちあがる、直口の口縁部をもつ口縁径15.5cmの高坏である。口縁部から稜線まで6本の凹縁をめぐらしている。内外面とも黒褐色を呈し、丁寧にヘラミガキを施している。外面には口縁部まで煤が付着しており、内面には炭化物がみられる。胎土には砂粒、雲母を含み、焼成は良好である。

PitNo.2：弥生時代中期の壺、甕、高坏、壺用蓋などを出土している。他に木の実が発見されている。

PitNo.3：弥生時代中期の壺、高坏、及び木片。

PitNo.4：直径約10cmの杭。

溝No.1：弥生時代中期の壺、甕。

溝No.2：弥生時代中期と思われる甕。

溝No. 5：弥生時代中期の甕

溝No. 6：弥生時代中期の甕、高坏

甕(第9図-3)(口縁径14.5cmで、や、短い口縁部は、斜めに外反し、端部は丸くおわる。内外面にや、肥厚する。口縁部は内外面ともヨヨナア、頸部以下外面は縦方向に刷毛目調整が施されている。口縁端面まで煤が付着。淡茶褐色を呈し、胎土に1~2mmの砂粒及び雲母を含む硬質の土器である。高坏は水平にひろげた口縁部をもち、外端面が下方に幅広く垂下するもので、垂下部に4本の細い凹線をめぐらし、凹線に直行して6本1組の列点文を施す赤白色の土器である。

溝No. 7：弥生時代中期の甕。

山賀遺跡

No.1 トレンチでは3層及び4層に遺物を包含している。3層では瓦器、黒色土器、須恵器、4層では瓦器、須恵器、土師器を出土した。

No.2 トレンチでは5層及び18~22層に遺物を包含している。5層はNo.1 トレンチの3層に対応し、瓦器、土師器が、18~22層では、弥生時代前期の土器が出土した。

No.3 トレンチでは2層、8層、11層、12層、13層、14層、15~16層、17層に遺物を包含している。〔図版15、16〕

2層：瓦器、灰釉陶器、須恵器、土師器。

8層：弥生時代Ⅱ様式からⅤ様式の壺、甕、鉢。また溝No.1からⅤ様式の甕が出土している。

11層：弥生時代Ⅰ様式からⅢ様式の壺、甕、またPitNo.2からⅢ様式の高坏出土しており、南側溝からⅠ様式の土器が出土している。

12~3層：弥生時代Ⅰ様式の壺、甕、鉢、壺用蓋、甕用蓋などを中心に、外面にヘラケズリのある甕、櫛描直線文のつく壺など中期の土器が混ざる。15~6層に比してⅠ様式新段階の土器が多くある。他に鹿角製品と杭が出土している。

13層：弥生時代Ⅰ様式

14層：弥生時代Ⅰ様式の壺、甕、鉢、壺用蓋などが多量に出土している。中段階が中心で、新段階の土器が少量混入する。赤色彩文を施した土器がめだっている。なお鉢型土器の底部に、焼成後内外面から穴を穿ったものがある。他にくるみなどの木の実獣骨が出土している。

15～6層：弥生時代Ⅰ様式の壺、甕、鉢、壺用蓋、甕用蓋などが多量に出土している。基本的な性格は14層と変わらず中段階を中心に新段階の土器が少量混ざる。他に木の実、しじみ、獣骨及び木片が出土している。

No.4 トレンチでは1層、8層、10層に遺物を包含しており、1層では土師器、8層では弥生時代中期の土器、10層では弥生時代前期（新段階）の土器を出土している。なお8～9層に大きな木の幹があった。

第5 トレンチでは、1層、2～3層、12層、17層に遺物を包含しており、1層では瓦器、土師器、2～3層では、須恵器、12層では弥生時代前期～中期、17層では弥生時代中期の土器が出土している。

佐堂遺跡

No.1 トレンチでは、1層、3層、3～4層、5層及び13層に遺物を包含している。1層では土師器及び陶器、2層では土師器、須恵器、3～4層では須恵器、土師器と共に黒色土器、瓦器等が出土している。第8図は口縁径15cmの瓦器碗である。磨滅が甚しく詳細は不明であるが、口縁部外面は幅広くなでっており、端部内面にあるいは沈線があるのかもしれない。高台がつく。5層からは羽釜、13層からも土師器が出土しているが、詳細は不明である。



第8図 佐堂遺跡出土土器
実測図(寸)

No.2 トレンチでは8層で和銅開珎（第8図）が、又8～9層で須恵器、土師器が出土している。

城山遺跡

No.1 トレンチでは、2層、3層、4層、5層で遺物が出土している。

2層：古墳時代後期の須恵器（坏、坏蓋、高坏、壺、甕、釀）を中心に、瓦器、瓦などが混る。

3層：弥生式土器（中期）

4層：弥生式土器

5層：土師器、口縁径11.9cm、器高4.6cmの坏で、丸い底部から弧を描くようになだらかに開いてゆき、口縁部は丸くおさまる器形である。底部外面は粗雑な整形で、指頭圧痕が顕著に残る。口縁部内外面はなでており、内面は底部中心付近から上方へ放射状暗文をひいている。暗文の密度は低い。7C後半までは降らないと思われる。

第2 トレンチでは4層、6層、8層から遺物が出土している。

4層：土師器

6層：土師器（高坏）

8層：須恵器（坏蓋）

口縁径16.3cm、器高3.7cm。天井部外面は鈍いヘラケズリを施し、中央部に扁平な

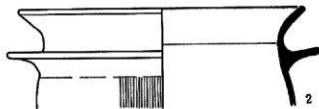
宝珠形つまみをつけている。

口縁端部は下方へ短く屈曲し、内面のかえりは消滅している。

灰色を呈し、胎土は良質で、1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は、堅緻である。外面に自然釉。（第11図-1）

土師器（釜）

口縁径26cmで、外反する口縁部に幅3cm程の鋳が付き、円筒状に長い胴部をもつと思われる。口縁内外面はヨコナデ、胴部外面には刷毛目が縦方向につく。口縁端部まで煤が付着している。茶褐色を呈し、胎土



第11図-1 城山遺跡No.2 トレンチ出土土器実測図(土)



第11図-2 城山遺跡No.2 トレンチ出土土器実測図(土)

に雲母を含む。(第11図-2) 他に弥生時代中～後期の甕、壺が出土している。

〔Ⅶ〕花粉分析等による河内平野の自然環境の変遷 (弥生時代、古墳時代を中心に)

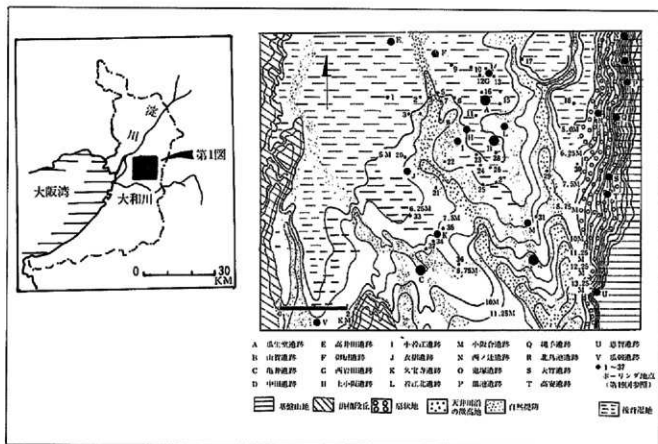
はじめに

大阪府河内平野は畿内弥生文化の一大中心をなし、瓜生堂遺跡をはじめ瓜破遺跡・森小路遺跡・西諸福遺跡・山賀遺跡・亀井遺跡・恩智遺跡など、弥生時代前・中期の主要な遺跡が立地する(第12図)。しかるに、弥生時代中期末、突如これらの諸遺跡は放棄される。そうしてその後、遺跡は地表下4 m前後に埋没し、現在にいたっている。それではこの弥生時代の中期末に、河内平野の人々が居住地を放棄せざるを得なくなった原因は、一体何に求められるのであろうか。本報告は弥生時代の中期末、河内平野をおそったこの激変に焦点をあて考察を加えるものである。本報告をまとめるにあたっては、大阪府教育委員会田代克己氏、大阪文化財センター中西靖人氏、日本道路公団白倉恒夫氏、瓜生堂遺跡調査会今村道雄氏から種々のご援助をいただいた、記して厚くお礼申し上げます。また友人の丸橋晃氏からは献身的な援助をいただいた、記して厚くお礼申し上げます。

I. 現在の河内平野の地形環境

河内平野は東を生駒山地、西を上町台地にかこまれた地溝性の凹地に、大和川と淀川の堆積作用によって形成された平野である。本橋でとり扱う河内平野は、その内主に、大和川の堆積作用によって形成された部分である。

大和川は1740年の河道付替工事によって現在の流路をとる前は、河内平野を三本の分流となって流下していた。現在の長瀬川・玉串川、平野川がそれである。大和川は粗粒堆積物を運搬してこない⁽¹⁾ので、河内平野に入ってから扇状地の顕著な発達が見られない(大矢1971.73)。かわりにこれらの分流は兩岸に顕著な自然堤防を形成し、人為的河道の固定も伴って、天井川の様相を呈している(第12図)。これらの自然堤防は鳥趾状に三角州にはり出す形をとっており、



第12図 河内平野の微地形と弥生時代遺跡の分布

自然堤防の背後には低湿な三角州ないしは後背湿地が広がっている。この自然堤防は河道に沿って南北方向に発達するが、大東市深野・東大阪市鴻池周辺にまでいくと、顕著な発達が見られない。このことは、大和川の堆積作用はこの地域にまでは顕著に及んでいないことを示し、近世までこの地域が潟湖として残されていたことを物語っている。

自然堤防上は現在は畑地、住宅地として利用され、三角州・後背湿地は水田として利用されているが、水田にも急速な宅地開発が進行している。

河内平野の現在の地形環境の概略は以上の如くであるが、それでは弥生時代前・中期の人々が居住した当時には、いったいどのような環境が河内平野に展開していたのであろうか。そうして、その後いかなる変化を経て現在にいたったのであろうか。

II. 弥生時代遺跡の立地環境

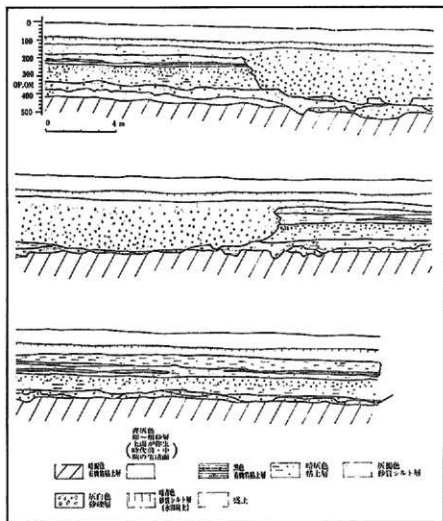
弥生時代前・中期の埋没地形を復原し、弥生時代から現在にいたる景観変遷史をあむためには、まず個々の弥生時代遺跡の立地環境の分析から始めなければならない。

II-① 瓜生堂遺跡

瓜生堂遺跡は東大阪市瓜生堂にあり、遺跡の埋没する地表面高度は4 m前後である(第12図)、この遺跡は昭和40年以降発掘が続けられ、とりわけ寝屋川南部下水道工事に伴う発掘によって、遺跡は河内平野の中でも最大の弥生時代遺跡であることが明らかとなった。これまでに方形周溝墓などの遺構と共に多数

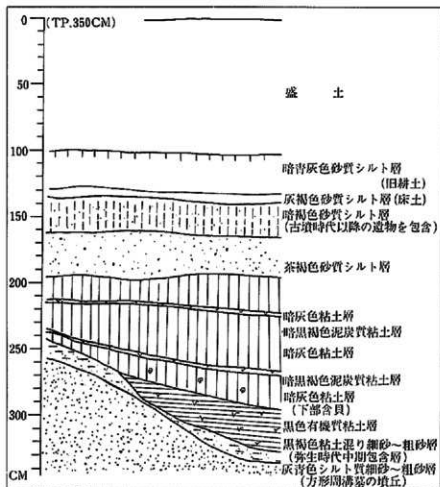
の弥生時代前・中期を中心とする土器・木器などの遺物が検出されている(瓜生堂遺跡調査会1971・73)。

第13図は昭和47年に発掘されたトレンチの断面の実測図を示す。弥生時代前・中期の生活面は、暗褐色有機質粘土層の上に堆積した青灰色の細砂～粗砂層の上



第13図 瓜生堂遺跡トレンチ断面図

面である。この弥生時代前・中期の生活面をなす砂層の上部には、黒色の有機質粘土層が30～40cm前後の層厚で堆積し、その上部には灰青色粘土層、灰褐色シルト層、灰白色砂礫層ならびに人工的盛土が3m近くの層厚で堆積し遺跡を埋積している。



第14図 瓜生堂遺跡30S地区トレンチ断面図

ところによっては土師器を含む灰白色の砂礫層が溝状に深く入りこんでいる(第13図参照)。

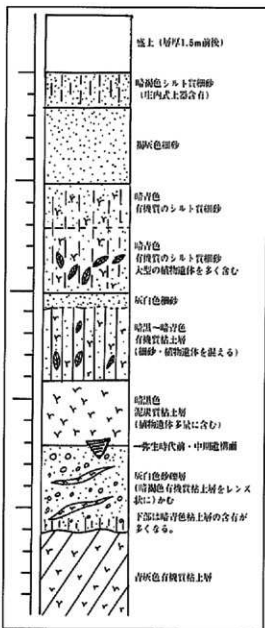
また第14図には昭和49年に発掘されたトレンチの断面の実測図を示す。このトレンチの断面からは、弥生時代の方形周溝墓を埋積した過程が明白に読みとれる。すなわち方形周溝墓の墳丘は青灰色のシルト質細砂～粗砂からなり、弥生時代中期の人々が居住した当時、遺跡周辺にはこの砂層が広く堆積していたことがわかる。この方形周溝墓を覆って、まず周溝墓周辺の低い溝の部分に黒色有機質粘土層が30～50cm前後の層厚で堆積する。その上部に暗灰色粘土層が80cm前後の層厚で堆積する。暗灰色粘土層の中部には暗褐色粘土質泥炭層の薄層(層厚5cm)が水平に連続的に堆積している。またその下部には、貝ガラ片が含まれる。

この暗灰色粘土層には遺物は含まれない。暗灰色粘土層の上部には灰褐色の砂質

シルト層～細砂層が30cm前後の層厚で堆積し、古墳前代の遺物を出土する。
この上部20～30cmは旧水田耕上の灰青色砂質シルト層が堆積し、その上を1.5mの盛土が覆う。

II-② 山賀遺跡

山賀遺跡は瓜生堂遺跡の南1.5kmの地点にある。遺跡の断面図は第15図に示す如くである。すなわちトレンチの最下部には広く暗褐色有機質粘土層が堆積し、その上部には30cm前後の層厚で灰白色砂礫層が堆積する。弥生時代中期の遺物はこの灰白色砂礫層の上面から出土する。この弥生時代中期の遺物包含層の上部には、30cm前後の暗黒色泥炭質粘土層が堆積する。さらにその上部には暗青色粘土層が70cm前後の層厚で堆積する。この暗青色粘土層には砂質分の含有が多く、また植物遺体も多く含まれる。この粘土層の中部には灰白色の細砂の薄層を挟在する。暗灰色粘土層の上部はしだいに砂質分が多くなり、有機質を多く含むシルト質細砂にかわる。この上部には層厚50cm前後の灰白色シルト質細砂が堆積し、庄内式の土器を出土する。

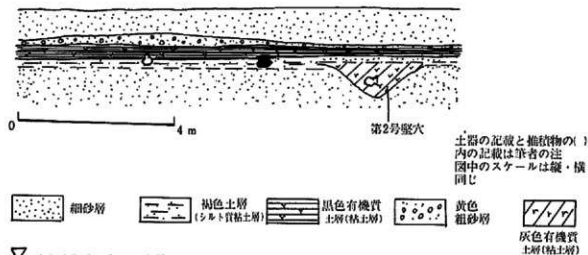


第15図 山賀遺跡のトレンチ断面図

II-③ 瓜破遺跡

瓜破遺跡は河内平野の西南の隅にある(第12図)。この遺跡を発掘した結果について、杉原・神沢(1961)²⁾により報告されている。第16図にはその報告書の

トレンチの断面の一部を示す。弥生時代前期の生活面は灰青色細砂層の上面であり、この細砂層を覆って褐色粘土層・黒色有機質粘土層が堆積し、その上部に黄色砂層が堆積することが報告されている。



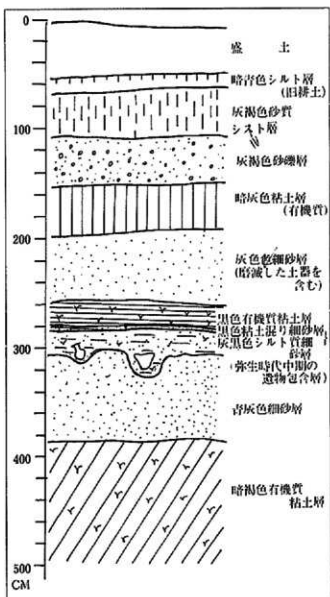
第16図 瓜破遺跡のトレンチの断面図(杉原・神沢1961)

II-④ 大阪文化財センターの試掘調査

近畿自動車道の建設に伴い、大阪文化財センターが昭和49年度に実施したトレンチの断面の一部を第17図に示す。このトレンチの断面からも明らかな如く、弥生時代前・中期の生活面は灰青色シルト質細砂の上面であり、この弥生時代の生活面を覆って、暗黒色有機質粘土層が10cm前後の層厚で堆積し、さらにその上部に貝ガラ片を含む灰青色有機質粘土層が20cm前後で堆積している。この試掘のトレンチでは、特に弥生時代前・中期の生活面となった灰青色の砂層の下部に堆積する暗褐色～暗灰色の有機質粘土層にまで試掘の範囲が深められ、花粉分析・化学分析・C14年代測定用の泥土を採取することが出来た。目下、詳細な分析を断続中であり、この分析結果によって、たんに弥生時代だけでなくそれ以前の時代の河内平野の自然環境の様相について、近く明らかに出来るであろう。

以上述べたことから明らかな如く、河内平野に埋没する主要な弥生時代前・中期の遺跡の立地環境と埋没状態には、以下の如き共通点が認められた。

すなわち、第1に弥生時代前・中期の生活面は、いずれも灰青色の砂層の上面であること。第2にこれらの弥生時代前・中期の遺構・遺物は、層厚30~50cm前後の黒色有機質粘土層によって一様に覆われること。第3に黒色有機質粘土層の上には、貝ガラ片を含む暗灰色粘土層が堆積すること。そうして第4にこの弥生時代前・中期の遺構・遺物を覆う暗灰色粘土層は無遺物層であること。第5にその後の遺物が出土するのは、その上部に堆積する灰褐色砂質シルト層ならびに灰白色砂礫層であり、そこから弥生時代後期末から古墳時代以降の遺物が出土することである。



第17図 瓜生堂遺跡 No.2 トレンチ断面図

つぎに、こうした河内平野のごく限られた地点に存在する遺跡において認められた共通点が、果して河内平野に広く認められる現象であるかどうかを検討する必要がある。そのために、これまでに明らかになったボーリング資料の検討をつぎに行なった。

Ⅲ ボーリング資料の検討

Ⅲ-① 遺跡の層序とボーリング柱状図の対比

遺跡の層序とボーリングの柱状図とを対比する場合、弥生時代前・中期の遺

構を覆う黒色有機質粘土層が有効なカギとなる。第18図には近畿自動車道天理～吹田線荒本～若江間の土質調査に際して得られたボーリング柱状図の一例を示す。

このボーリング柱状図で腐植土（暗灰）と書かれた部分が、堆積深度ならびに上下の層相との関連からいって、黒色有機質粘土に比定されるものとみてよい。この黒色有機質粘土層の下位には、弥生時代前・中期の生活面となった砂層に比定される堆積物が、ボーリング柱状図にも明白に示されている。さらにその下部には、遺跡の層序において広く共通して認められた暗褐色有機質粘土層に

比定される粘土

が記載されている。

第19図は瓜

生堂遺跡のトレ

ンチの断面とこ

これらのボーリ

ング柱状図とを、

黒色有機質粘土

層をカギ層とし

て、対比したも

のである。この

図から明らか

のように、遺跡

で認められた層

序の変化は、遺

跡から離れた

地点のボーリ

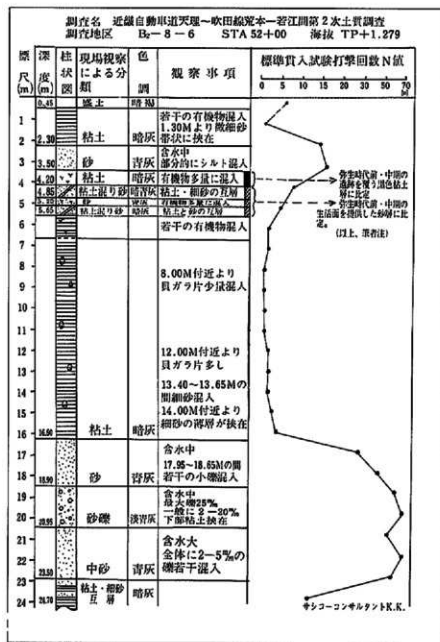
ング柱状図の

いくつか

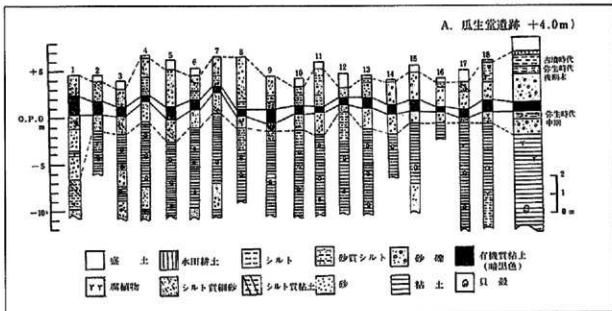
においても、類

似の変化が認

められることが



第18図 ボーリング柱状図



かる。

Ⅲ—② 弥生時代の河内平野の縦断面図

近畿自動車道天理～吹田線の土質調査に際して、松原インターチェンジから門真市にかけて河内平野の中央部を縦断する形で(第10図参照)、平均100m間隔にボーリングが行なわれた。第20図は、日本道路公団の白倉恒夫氏のご厚意により借用したボーリング柱状図を、あらためて筆者が整理して作成した河内平野の南北方向の地質断面図である。この断面図では南部と北部の一部と深度25m以下は省略してある。

第20図の①の図から明らかのように、地質断面図は大きく下位より下部粘土層(含貝)―中部砂礫層―中部粘土層(含貝)―上部砂層―上部粘土層(有機質)―最上部砂礫層に一応区別される。なお、この図では省略したが深度30m以下には下部砂礫層が存在する。

すでに述べたことから明らかのように、弥生時代前・中期の生活面となった砂層は、この断面図では上部砂層に、遺構面を覆う黒色有機質粘土層ならびに暗灰色粘土層は、上部粘土層(有機質)に比定されることがわかる。

第20図の②は、これらの堆積層の上面高度をボーリング柱状図から計測し、

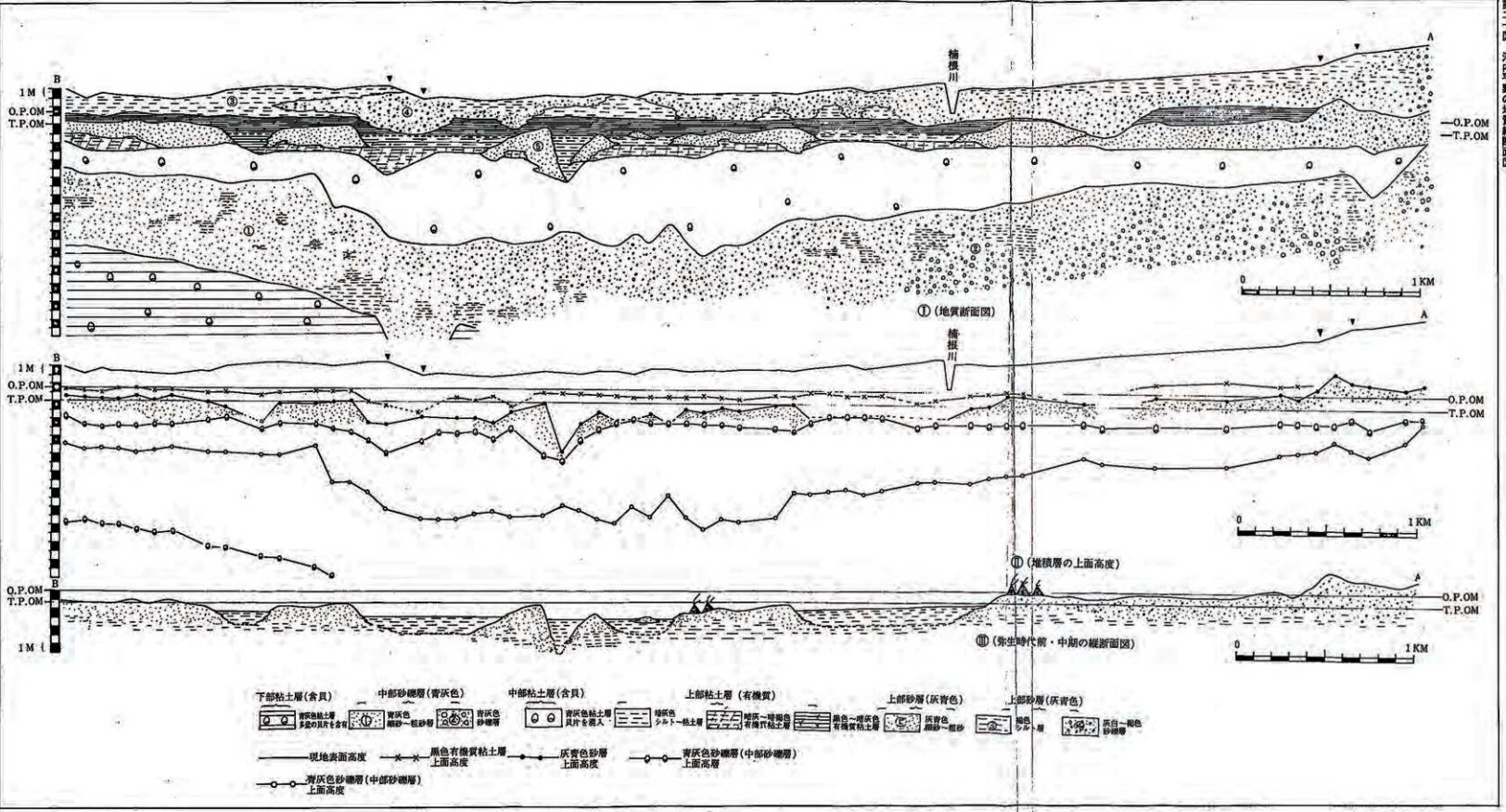
それをつないだものである。暗褐色有機質粘土層に比定される中部粘土層（含貝）の上面高度は、T.P.—2 m前後、O.P.—3.5 m前後のところにある。この中部粘土層（含貝）の上部1～2 mは有機質に富み、下位にいくにつれ含貝の割合が高く内湾性の粘土層の様相を示している。一方、この上部に堆積する弥生時代前・中期の生活面となった上部砂層の上面高度は起伏に富み、砂層の堆積は不連続である。おそらく、この砂層は大和川の自然堤防的ないしはデルタ・イックファンの堆積物であり、砂層と砂層の間に堆積する有機質粘土層は、後背湿地ないしは三角州性の堆積物であるとみられる。第20図の③は、この砂層とその間に堆積する有機質粘土層の上面高度を示したものである。きわめて大略的ではあるが、この図が、弥生時代前・中期の河内平野の表層地質縦断面図であるとみてよいであろう。

弥生時代前・中期の生活面となった砂層の上面高度がきわめて起伏に富んでいたのに対し、その上部に堆積する黒色有機質粘土層ならびに暗灰色粘土層の上面高度は、部分的に上部の灰白色砂礫層の溝状堆積によって切られてはいるものの、きわめて平坦である。黒色有機質粘土層は多量の有機物・植物遺体を含み、ところによっては泥炭質の様相を示している。この黒色有機質粘土層は後述する如く、ボックスファンの堆積物とみられる。さらにこの上部に堆積する暗灰色粘土層の下部には貝ガラ片が含まれ、かつ、この粘土層の中部にはところによって、泥炭質粘土の薄層が水平に認められることから、おそらく潟湖性の堆積物であると考えられる。

この上部粘土層の上には、弥生時代後期末以降の遺物を含有する最上部砂層が堆積する。この最上部砂層は主に自然堤防堆積物からなり、ところによって旧河道の溝状堆積物が深くきれこんでいる。

Ⅲ—③ 弥生時代の河内平野の平面図

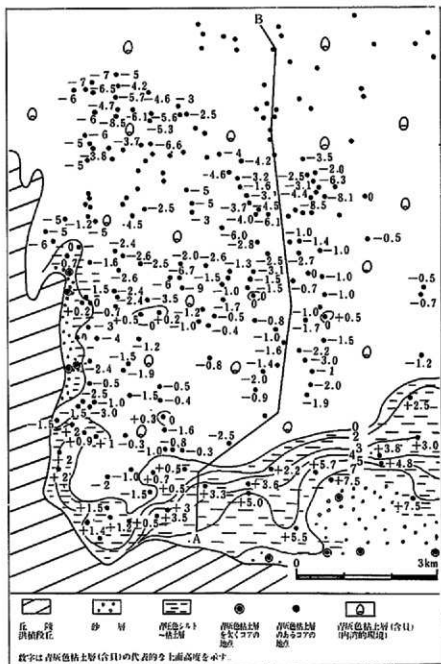
近畿自動車道天理～吹田線のボーリング資料から、河内平野には、弥生時代前・中期の生活面となった砂層・ならびにそれを覆う黒色有機質粘土層が広く堆積していることが明らかとなったが、それでは、こうした砂層はどのような水平的



なひろがりを持って堆積していたのであろうか。つぎに筆者は、こうした弥生時代前・中期の埋没地形を復元するため、既存の大阪湾沿岸のボーリング資料について整理を行った。

第21図は、含貝の中部粘土層の上面高度について示したものである。●印は含貝の粘土層が認められるもの。○印は粘土層が認められないものの代表的な柱状図の位置を示したものである。この第10図から明らかのように、この時代には内湾性の環境が広がっていたことがわかる。

第22図には弥生時代前・中期の生活面となった砂層の上面高度をとったものである。●印のボーリング地点は砂層のあるもの、ならびに○印のボーリング地点は砂層のないところである。さらに、その後の地質の沈降を全く無視して、砂層の上面の海拔高度をつなぐと、図22のような微地形が現出した。すなわち、

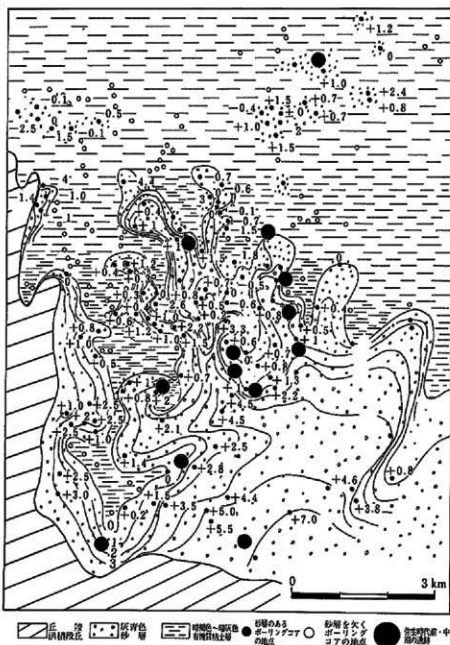


第21図 縄文海進期の河内平野

弥生時代前・中期の生活面となった砂層は、鳥趾状にはり出した形で堆積している。また鳥趾状にはり出した砂層の表面には、浅い谷状の地形が認められる。これがおそらく井関弘太郎³⁾(1963)の指摘した埋積浅谷に相当するものと思われる。さらにこの図に弥生時代前・中期の遺跡をおとしてみると、興味深い事実が明らかとなった。すなわち、弥生時代前・中期の遺跡は、有機質粘土層の堆積する低湿地に鳥趾状に押し出した砂堆の先端部ないしは埋積浅谷に比定された凹地の谷頭部付近に立地するのである。いずれも、遺跡の立地する前面あるいは側面には、

水田に好適な低湿地がひかえているのである。

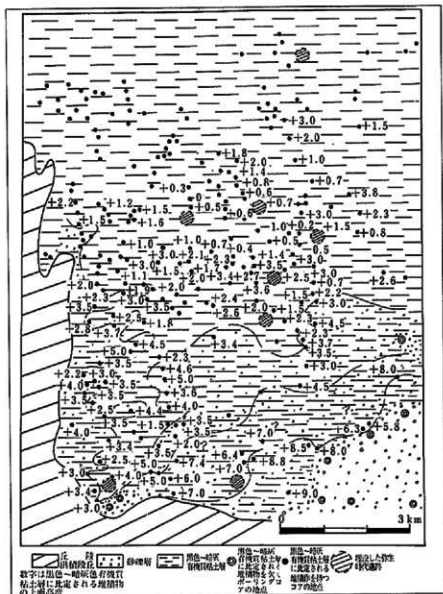
ここでは地盤の沈降を全く無視しているの、いまだ多くの検討すべき余地は残されているが、弥生時代前・中期の埋没地形を復原し、それと先史時代の人類との関連が明らかとなったという点で、この図は今後の第四紀学・先史学にとって大きな意味を持つものと思



第22図 弥生時代前・中期の河内平野

う。

第23図は、弥生時代の生活面を覆う黒色有機質粘土層の上面高度を、ボーリング資料に基づき示したものである。この図から明らかのように、弥生時代中期末以降、河内平野の南部を除いて、広く潟湖性の環境が広がったことがうかがわれる。ただ河内平野の南部はボーリング資



第23図 弥生時代中期末～後期の河内平野

料が少なく、この地域の様相については、今後の検討が必要とされる。こうした潟湖性の堆積環境は、河内平野においては、弥生時代の後期末頃までつづいた。それは、潟湖性の堆積物と考えられる暗灰色粘土層は無造物であり、その上部にくる灰褐色シルト層あるいは、砂礫層からは弥生時代後期末以降の遺物しか検出されないことからうかがわれる。

弥生時代後期末～古墳時代以降は、現在の沖積平野の微地形を形造るような自然堤防形成期がおとずれる。

以上の如く、ボーリング資料と遺跡の層序との対比から、河内平野における弥生時代前・中期頃の地形環境を復元する基礎的データは提示した。

つぎに、当時の植生環境を復元するため、花粉分析を行なった。

Ⅳ 花粉分析

河内平野の弥生時代前・中期の植生を復元するための一つ的手段として、筆者はこれまでに瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析を行なった(安田1973⁴⁾)。第24図はそのうちの代表的な花粉・胞子の出現率を示したものである。この図から明らかのように、弥生時代前・中期の生活面となった砂層が堆積する以前には、常緑カシ属・シイ属などの樹木花粉の出現率が高く、草体花粉・胞子の出現率は低率である。ところが、弥生時代前・中期の生活面となった砂礫層の上面にあたる遺物包含層では、こうした樹木花粉の出現率が激減し、かわってイネ科・スゲ科・ウラボシ型胞子などの草本花粉・胞子の出現率が急増してくる。このことは、砂層の堆積によって周辺にはこうした草本類を生育させるような荒地が形成されたことを物語る。弥生時代の人々が瓜生堂遺跡周辺に最初に居住を開始したのは、まさにこうした禾本科の草本が多数生育するような荒地であったと考えられる。こうした花粉分析からの結果は、瓜生堂遺跡から出土した土器に、カニグモ科の一種ハナグモの幼虫の跡が残されていた事実(大阪府立花園高等学校1970⁵⁾)ともうまく対応する。すなわちハナグモはうっそうとした森林の中ではなく、荒地に生息する種なのである。また弥生時代前・中期の遺物包含層においては、その後も常緑カシ属・シイ属の花粉が増加せず、弥生時代人の森林に対する impact が考えられた。

この瓜生堂遺跡一地点の分析結果から、河内平野全体の弥生時代遺跡の植生環境について論及することはできないが、沖積平野の鳥趾状にはり出した砂堆の上に立地した遺跡周辺の植生は、おおむね瓜生堂遺跡の如く、禾本花の草本類あるいは羊歯類が生育するようなオープンな荒地であったと考えられる。もちろん、この時代、扇状地や山麓部に立地する遺跡の分析結果(安田1974⁶⁾)からは、瓜生堂遺跡などの平野部の遺跡に比して常緑カシ属・シイ属・エノキ属・ムクノキ属などの樹木花粉の出現率が高く、これらの遺跡周辺は、瓜生堂遺跡などの沖積平野に立地する遺跡に比して、より森林密度の高い環境であっ

たことが考えられる。

遺跡が放棄されてから堆積した黒色有機質粘土層の分析結果からは、スゲ科、ヒシ属・ミズワラビ属などの低湿な環境に生育する草本花粉・胞子の出現率が増加し、低湿な環境の下にこの黒色有機質粘土層が堆積したことを物語る。またこの層準からはスギ属・常緑カシ属・ナラ属などの樹木花粉が再び増加し、遺跡の放棄に伴なり再び森林が回復してきたことを示している。

すでに述べた如く、瓜生堂遺跡一地点の分析結果から河内平野全体の植生を復元することは困難である。また遺跡まった中で分析結果とやや離れた地点での分析結果とでは、当然結果も異なることが予想される。こうした詳細な植生環境の復元については、目下これまでに得た河内平野の諸遺跡の泥土の花粉分析を継続中であり、あらためて報告する予定である。

V 考 察

V-① 環境の変遷

遺跡の層序・ポーリング試料・花粉分析から考察した河内平野における弥生時代～古墳時代の自然環境の変遷を模式的に描くと、第25図の如くなる。

1) 弥生時代前、中期の人々が居住する以前、河内平野は内湾の堆積環境が広がっていた。周辺の丘陵部には常緑カシ属・シイ属がうっそうと繁茂していた。

(第25図-I参照)

2) ところがその後、弥生時代前期の直前、灰青色の砂層を堆積するような洪水期があった。砂層は三角州に鳥趾状に押し出す形で堆積した。砂層の堆積した地表面には禾本科の草本や羊歯類が生育する草地が形成された。

(第25図-II参照)

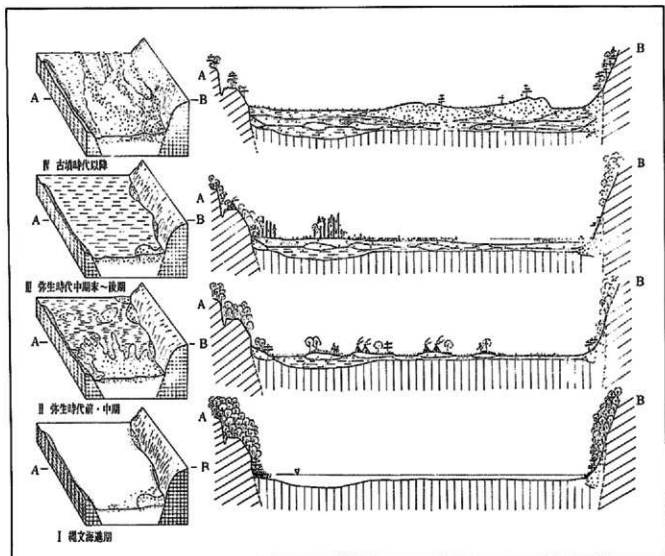
3) 弥生時代前期の人々が居住を開始したのは、まさにこうした時であった。彼らの居住地は三角州の低湿地に鳥趾状に押し出した砂層の先端部あるいは、埋積浅谷の谷頭部付近に立地し、近くには水田稲作農業に適した低湿地が存在した。遺跡周辺の植生はイネ科、ウラボシ科などの草本類。羊歯類の生育するオープンな草原であった。こうした環境は弥生時代中期まではほぼ継続して存在した。

(第14図-II参照)

4) ところが、弥生時代中期末、突如河内平野には潟湖性の環境が訪れる。河内平野一帯には黒色の有機質粘土層が堆積を開始した。弥生時代中期末の人々は、このように遺跡周辺が居住をゆるさないほどに低湿地化したため、ついに居住地を放棄せざるを得なくなった(第25図-III参照)。遺跡周辺の低湿地には、スゲ科・ヒシ属・ミズワラビ属などの低湿地に生育する草本類・羊歯類が生育を開始した。また遺跡の放棄に伴って部分的には、森林の回復も認められた。この黒色有機質粘土層の上部には、含貝の暗灰色粘土層が堆積し、その後さらに潟湖の水位が上昇したことがうかがわれた。こうした潟湖の環境は弥生時代後期にわたって継続したと思われる。

5) 弥生時代後期末から古墳時代初期にかけて、これまでの潟湖性の環境は、

一変して、褐色シルト層あるいは褐色砂礫層を堆積し、自然堤防を形成するよ
うな氾濫原の環境が訪れ、河内平野には再び人々が居住を開始した。(第25図
—IV参照) 弥生時代後期末以降の河川の堆積作用が現代の河内平野の微地形を
決定する上で大きな意味を持つことになった。



第5図 河内平野に於ける縄文海進期以降の環境変遷図

河内平野における環境の変遷は以上の如くであるが、それでは、こうした環
境の変化をひき起こした原因は一体何に求められるのであろうか。つぎにこの
点について考察する。

V-② 海水準の変動

上町台地から北方に伸びる砂州があり、河内平野が内湾であった時代、あるいはその後の堆積環境の変化が、海水準の変動を敏感に反映したかどうかは問題がある。しかし、沖積平野におけるこうした堆積環境の変化が、海水準の変動と全く無関係であったとは思われない。(第26図参照)

含貝の中部粘土層が堆積した当時、河内平野は内湾の堆積環境の下にあった。含貝の中部粘土層の上面高度はT.P. - 2 m前後である。(第26図-①)

その後の地盤の沈降を考えて、当時の海水準は少くとも現在ぐらいかあるいは現在より1~2 m高位にあったことが想定される。この中部粘土層を縄文海進期の堆積物とみることができよう。この中部粘土層の上部1~2 mは貝の混入がしだいになくなり、かわって上部粘土層に比定される暗褐色有機質粘土層となる。ところによっては、この暗褐色有機質粘土層は溝状に下部に切り込んでいる。(第20図参照)。このことは、海水準の低下に伴ない、河内平野が内湾性の堆積環境から潟湖性あるいはボックスワンプの堆積環境に変化したものと考えられる。この海水準の低下は、すでに多くの諸先学によって述べられてきた縄文時代後・晩期以降の海水準の低下に対応した現象であると考えられる。

さらに、この暗褐色有機質粘土層の上部には、弥生時代前・中期の生活面となった灰青色の砂層が堆積した。このことは、河内平野が潟湖性の環境からデルタチックな堆積環境に変化したことを物語る。弥生時代前期の人々が、この河内平野に居住を開始したのは、まさにこうした時であった。したがって、弥生時代前・中期の人々が居住した当時の海水準は、現在よりも低位にあったものと考えられる。(第26図-②)

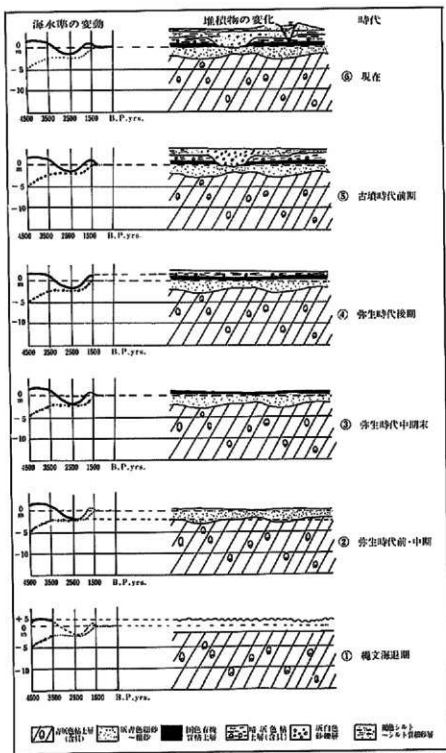
ところが、弥生時代中期末以降、河内平野には再び黒色の有機質粘土層を堆積するような低湿な環境が訪れる。こうした黒色の有機質粘土層を堆積されるような環境の変化は、海水準の上昇にもとめられるのではなからうか。すなわち、海水準の上昇は地下水位の上昇をひき起し、海水が侵入する直前に、砂州背後のボックスワンプの地域に泥炭を形成するような低湿な環境をもたらした

ものと考えられるのである。(第26図—③)さらにこの黒色有機質粘土層の上部には、含貝の暗灰色粘土層が堆積する。このことは、海水準がさらに上昇し、バックスワンプに起源を有する黒色有機質粘土層が、潟湖性の堆積物によって覆われたことを示しているとみられる(第26図—④)瓜生堂遺跡のトレンチにおいて暗灰色粘土層の中部には、泥炭質粘土層の薄層がきわめて水平に連続的に堆積していることから、この粘土層は安定した静水域に堆積したものとみられる。

以上の如く、縄文時代後・晩期以降海退に転じた海水準は、その後、弥生時代前・中期の間は継続して現在より低位にあったものとみられた。ところが弥生時代中期末以降、しだいに上昇期に入ったものとみることが出来る。この海水準の上昇によって、河内平野は人間の居住をゆるさなほどの低湿な環境となった。弥生時代中期末、突如河内平野の弥生時代遺跡が放棄される原因は、まさにこの海水準の上昇に求められるのではなからうか。

一方、すでに遠藤邦彦(1974a.b)⁷⁾・井関弘太郎(1974)⁸⁾によって述べられている如く、海水準の上昇が認められる弥生時代中期末以降、後期にかけては、新砂丘(遠藤のDy I)の形成期にあたるのである。すなわち、縄文時代晩期～弥生時代前・中期の海水準低下期には、海岸線の前進によって、内陸部の砂丘は植生で覆われ安定期に入っていた。ところが、弥生時代後期以降、急速に砂丘の形式が再び活発化したことが明らかになっている。この新砂丘の形式の活発化は、当然、上町台地から北方に伸びる砂州の発達をもうながしたであろう。したがって、この砂州の形式の活発化によって、大和川の水が河内平野に広く停滞したことも十分に考えられる。砂丘・砂州の形成と海水準の変動とのかわりあいは、いまだ明白にし得ない点が多いが、この弥生時代後期以降の急速な砂丘の形成も、すでに井関弘太郎(1972)⁹⁾が述べている如く、弥生時代中期末以降の海水準の上昇に対応した現象であるとみるのが、目下の所、もっとも適切であろう。

弥生時代中期末以降、再び上昇に転じた海水準が、その後、現在よりも高位に達したかどうかは現時点では明白にし得ない。しかし、砂州背後の河内平野



第25図 海水準の変動と堆積物の変化

の水位は、現在の基準面以上に達したであろう。この水位の上昇には、砂州の発達に伴う大和川の河口の閉塞が大きな役割を果していたものと考えられるのである。

河内平野においては、この潟湖性の環境は、弥生時代中期末以降、後期にか

けて存在していたようである。このことは、河内平野の内部において、弥生時代後期の前半～中頃の代表的な遺跡がないことから明らかである。ところが、弥生時代後期末から古墳時代初期にかけて、河内平野の堆積環境は再び変化する。すなわち、河内平野には、褐色のシルト層あるいは灰白色砂礫層を堆積させるような氾濫原の環境が訪れるのである。(第26図—⑤) そうして、平野の地表面には、現在みるような自然堤防。後背湿地・三角州の微地形の分布パターンが形造られた。古墳時代の遺物を含む灰白色の砂礫層はところによっては、溝状に深く切れ込み、その最深部は3 mも中達する。(第13図の瓜生堂遺跡のトレンチの断面図参照)。このことは、明らかにこの時代に入って、河内平野を流れる大和川の基準面が低下したことを示している。この基準面の低下をひき起した原因の1つとして、海水準の低下が当然予想される。しかし、この古墳時代に入ってから河内平野の基準面の変化を、海水準の変化にのみ原因を求めることはできない。なぜなら、この古墳時代以降に入ると、藤岡謙二郎(1972)によっても述べられている如く、上町台地から北方に伸びる砂州を開さくして、大和川と淀川の水を排水する堀江の築造が試みられた記載が記紀にみられるからである。記紀の記載が信頼性がうすいとはいえ、古墳時代に入ってから、こうした人為による地形改変が大きな役割を荷ったことが十分に考えられる。目下の所、この点について、明白な結論を下すことはできないが、弥生時代後期末以降、海水準の低下(?)あるいは堀江の開さくなどによって河内平野はしだいに干上がり、潟湖性の環境は減少していったとみることが出来る。しかし、大和川と淀川との堆積の影響を受けることの少なかった寝屋川流域一帯は、深野池・新開地などと呼ばれる池沼として、近世の新開発の時代まで潟湖性の堆積環境が残存したのである。こうした海水準の変化と堆積環境の変化を図示すると第26図の如くとなる。しかしながら第26図において海水準の変動として示したところは、厳密にいうならば、河内内湖の基準面の変動とすべきである。現時点においては、砂州をはきんで、海側と内陸側とでは、海水準の変動がどのような違いとなってあらわれるかは全く不明である。したがって、一応、砂州背後で認められた基準面の変化が、海水準の変化と大略の対応を示すという假定

の上に立って、第26図の如き海水準の変動曲線を描いたものである。

さらに、海水準が現在より高くなったり低くなったりしたという考えを取る以外に、むしろ海水準の上昇するスピードが変化したと考えることによって、河内平野における堆積環境の変化は説明できそうである。それを図示すると第26図の点線で表示した海水準変動曲線になる。すなわち、海水準の上昇するスピードが河川の堆積作用をうわまわっている時にはみかけ上、海水準が上昇したかに見え海水準の上昇速度がにぶり、河川の堆積作用がまさった時代には、海水準の低下があったかに見えるような変化が堆積物にあらわれる。

少なくとも我が国においては、縄文海進の海面高位期には、現在より海面が数メートルは上昇していたとみることが、ほぼ定説化している。したがって、現時点においては、第26図の実線で描いた海水準変動曲線が妥当のようである。しかし、第26図の点線で描いた海水準変動曲線を全く否定してしまう根拠も今のところ得られていない。今後、この点については、十分な検討が必要とされよう。

(広島大学総合科学部環境科学研究室)

安田 喜憲

参考文献

- 1) 大矢雅彦 (1971) 寝屋川流域水害構造解析図について、防災科学技術 22
—— (1973) 沖積平野における地形要素の組合せの基本型、早稲田
大学教育学部学術研究 22
- 2) 杉原荘介・神沢勇一 (1961) 大阪府瓜破遺跡、日本考古学協会編『日本農
耕文化の生成』東京堂出版 所収
- 3) 井関弘太郎 (1963) 瓜郷遺跡の自然環境、豊橋市教育委員会編『瓜郷』所収
- 4) 安田喜憲 (1973) 瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析、瓜生堂遺跡調査会『瓜生
堂遺跡Ⅱ』 所収
- 5) 大阪府立花園高等学校 (1970) 河内古代遺跡の研究
- 6) 安田喜憲 (1974) 日本列島における晩氷期以降の植生変遷と人類の居住、第
四紀研究 vol. 13
- 7) 遠藤邦彦 (1974a) 砂丘地帯における植生限界線について、日本地理学会予
稿集 6
—— (1974b) 礼文島船台湾岸砂丘の形成期とクロスナ層の性格につい
て、日本大学文理学部自然科学研究所『研究紀要』 9
- 8) 井関弘太郎 (1974) 日本における2,000年B.P. ころの海水準、名大文学部
研究論集 LⅪ
- 9) 井関弘太郎 (1972) 日本における三角州平野の変貌、第四紀研究 vol. 11
- 10) 藤岡謙二郎 (1972) 『大和川』 学生社

〔Ⅶ〕おわりに

昭和48年度及び昭和49年度の2年度にわたって実施した近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内に於ける遺跡の第1次発掘調査は、遺跡の範囲、埋没深度、遺構の性格、遺物の量、層位関係、重層関係等を正確に把握する目的をもっていた。

今回、当該発掘調査を終了してみても、これら頭書の目的はほぼ達成出来たと考えるが、遺構の性格については、調査面積の狭さから、具体的に把握するにはいたらず、ただ単に集落跡という程度の把握しか出来なかった。しかしながら、その他の点については、遺跡の明確な基礎資料が得られ、今後の本格的な調査や、それに伴う遺跡の保護、保存の問題にも積極的な資料となるであろう。

また、頭書周知されていたのは9遺跡（新家遺跡、西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩鹿寺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、友井東遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡）であったが、新たに長原遺跡、城山遺跡、佐堂遺跡の3遺跡が発見され、河内平野に於ける遺跡の性格等に大きな意義が認められるようになった。これらの遺跡は、各々に時期的に独立しているとともに、相互の関連性もまた極めて重要な問題として今後さらに我口古代史、特に古代国家成立史を考える上でどの遺跡も重要であるといわざるを得ない。

したがって、今後の府道中央環状線内部に建設が予定されている近畿自動車道天理～吹田線については、これら12の遺跡の保護、保存を十分に考慮し、これらの遺跡が個々にもつ重要性を把握する努力をばらうとともに、相互の関連性をも明らかに出来得るように充分な調査体制を確立することが必要であろう。また、これら本格的な調査を実施するにあたっては、調査後の遺構の保護、保存について積極的な姿勢が必要であると同時に、これらの遺跡が、関係市民、府民、あるいは国民に一般的な形で、その生活に活かされる方策を確立することが大切であると考ええる。

最後に、調査を実施するにあたり積極的な援助を下された日本道路公団の関係各位並びに調査関係者諸氏に深く感謝の意を表します。

〔IX〕参考文献一覧表

遺跡名	文献名称	発行人名	発行年月日
新家遺跡	中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査	中央南幹線内遺跡調査会	1971. 4
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	大阪文化財センター	1974. 10
西岩田遺跡	中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査	中央南幹線内遺跡調査会	1971. 4
◇	西岩田遺跡	◇	1971. 6
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	大阪文化財センター	1974. 10
瓜生堂遺跡	瓜生堂遺跡	河内市教育委員会	1966. 3
◇	東大阪市瓜生堂遺跡	大阪府教育委員会	1967. 3
◇	河内古代遺跡の研究	大阪府立花園高校	1970. 6
◇	河内考古学第2号	河内考古学研究会	
◇	瓜生堂遺跡1971	瓜生堂遺跡調査会	1971. 12
◇	瓜生堂遺跡資料編	◇	1972
◇	瓜生堂遺跡Ⅱ	◇	1973. 3
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	大阪文化財センター	1974. 10
友井東遺跡	河内考古学第3号	河内考古学研究会	
◇	近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書	大阪文化財センター	1974. 3
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	◇	1974. 10
久宝寺遺跡	八尾市史第1巻	八尾市役所	
◇	近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書	大阪文化財センター	1974. 3
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	◇	1974. 10
亀井遺跡	亀井遺跡発掘調査概要・Ⅰ	大阪府教育委員会	1971. 3
◇	同上Ⅱ	◇	1972. 3
◇	同上Ⅲ	◇	1973. 3
◇	近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書	大阪文化財センター	1974. 3
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	◇	1974. 10
城山遺跡	中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告	大阪文化財センター	1974. 5
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	◇	1974. 10
長吉遺跡	中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告	◇	1974. 5
◇	近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)	◇	1974. 10

山賀遺跡

土器番号	1	2	3	4	
種類	蓋	蓋	蓋	蓋	
法 量 (cm)	口径	11.2	12.3	10.6	12.9
	器高	不明	約3.1	2.7	不明
	腹径				
	底径				
出土地点	15-6層	14層	14層	14層	
形態	笠形を呈すると思われる。	笠形を呈し、中心に1孔をもつ。	2と同じ	笠形を呈す、口縁端面はところによって狭いところがある。	
文様		外面にところどころ朱彩のあとがある。			
整形	(外)	○ヘラミガキ	○ヘラミガキ	○ヘラミガキ	○斜め及び横方向にヘラミガキ
	(内)	○不整形の為かザラザラである。	○ヘラミガキ(横方向)	○指圧痕	○横方向にヘラミガキ
色調	(外)茶褐色 (内)暗灰褐色	(外)褐色 (黒)黒褐色	(外)暗茶褐色 (内)黒褐色	暗茶褐色	
胎土質	1-3%の砂粒、雲母を含む。 硬	1-3%の砂粒多い。 又雲母も混入。 硬	1-3%の砂粒及び雲母を含む。 硬	1-5%の砂粒及び雲母を含む。 硬	
備考					

土器番号		5	6	7
種類		壺	壺	壺
法 量 (cm)	口径	13.3	14.8	14.8
	器高	22.7	25.0	27.7
	腹径	21.3	23.1	26.5
	底径	7.3	7.7	8.3
出土地点		15-6層	15-6層	15-6層
口 頸 部	形態	短く、比較的开きの少ない口縁部をもつ。	比較的短く、開きの少ない口縁部	(6)と同じ
	文様	口頸部間に1条のヘラ描沈線	口頸部間に1条のヘラ描沈線	口頸部間に2条のヘラ描沈線(上の沈線は一部消えている) 口縁端面に朱彩
	整形(外)	ヨコナデの上をヘラミガキ	口縁部ヨコナデ頸部ヘラミガキ	口縁部よこなで、頸部斜め方向の細かいヘラミガキ
	(内)	ヘラミガキ	口縁部ナデ、頸部ヘラミガキ	横方向のヘラミガキ
肩 胴 部	形態	器高とかわらないぐらい腹径が発達している。	(5)と同じ	(5)と同じ
	文様	頸胴部間に2条のヘラ描沈線、沈線下に朱彩(弧文)	頸胴部間に段	頸胴部間に2条のヘラ描沈線
	整形(外)	ヘラミガキ	○刷毛目の上をヘラミガキ	○横方向にヘラミガキ
	(内)		○細かい刷毛目(下半は上にヘラミガキ)	○刷毛目、胴部下半はヘラミガキ
底部		平底 内外面ともヘラミガキ	平底	側面はヨコナデ、内面は外皮剥離している。
色調		黒褐色	(外)赤っぽい茶褐色 (内)黒褐色	黒褐色(中核)茶褐色
胎土質		1~3%の砂粒及び雲母を含む。 硬	1~4%の砂粒中核に多量を含む。雲母混入 硬	1~2%の砂粒及び雲母を含む。 硬
備考				口縁部付近煤付着

土器番号	8	9	11	
種類	壺	壺	壺	
法量 (cm)	口径	13.2	11.0	
	器高		19.4	
	腹径	不明	19.0	
	底径		6.7	
出土地点	15-6層	14層	14層	
口頸部	形態	短くちらあがってや、開く口縁部	(6)と同じ	比較的短く、や、開き気味の口縁部、焼成前に2孔1対の紐孔を穿つ
	文様	口頸部間に段、段以下に2条1組の縦線の朱彩	口頸部間に段	口頸部間に沈線か、口縁端面内外面及び沈線下に帯状の朱彩
	整形(外)	○ヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	ヘラミガキ
	整形(内)	○ヘラミガキ(くびれ部以下)指頭圧痕		
胴部	形態	不明	(5)と同じ 頸部は外湾気味	不明
	文様			
	整形(外)		横方向のヘラミガキ	
	整形(内)			
底部	不明	内面ヘラミガキ	不明	
色調	(外)黒褐色 (内)茶褐色	茶褐色	(外)茶褐色 (内)黒褐色	
胎土質	1-2%の砂粒及び雲母を含む。 硬	微砂粒及び雲母を含む。 硬	1-3%の砂粒及び雲母を含む。 硬	
備考				

土器番号	12	13	13	
種類	壺	壺	壺	
法量 (cm)	口径	15.2	13.2	17.0
	器高	不明	不明	不明
	腹径			
	底径			
出土地点	15-6層	15-6層	14層	
口 頭 部	形態	比較的短いが、斜め上に外反する口縁部	や、長めの大きく開く口縁部	大きく開く口縁部
	文様	口頭部間に1本の沈線	口縁端面に1本の沈線、口頭部間に削り出し突帯、口縁端面及び突帯の上に帯状の朱彩	口縁端面に沈線があると思われるが、きれいに1周しない。口頭部間に貼付突帯
	整形 (外)	○よこなでの上をヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ
	(内)	○口縁部ヨコ方向にヘラミガキ 頭部指ナデ		
肩 部	形態	不明	不明	不明
	文様			
	整形 (外)			
	(内)			
底部	不明	不明	不明	
色調	緑褐色	黒褐色	黒褐色	
胎土	1-3%の砂粒及び雲母を含む。	1-3%砂粒及び多量の雲母を含む。	中核に小石を含む、雲母混入	
質	硬	硬	硬	
備考				

土器番号	15	16	17	
種類	壺	壺	甕	
法 量 (cm)	口径	13.8	22.3	22.3
	器高	不明	37.0	
	腹径	26.2	20.6	不明
	底径	不明	6.5	
出土地点	15-6層	11層	14層	
口 頸 部	形態	(6)と同じ	漏斗状にひろく口頸部に、水平面をもって曲折し下方へ垂れる口縁部がつく。	腹径を狭く口縁をもつ。
	文様	口縁端面にヘラ描沈線、口頸部間に削り出し突帯頸部に2条1組の縦線文(朱彩)		口縁端面に刻み目、頸部に2条のヘラ描沈線
	整形 (外) (内)	○口縁部ヨコナデ、指圧痕が残る頸部横方向のヘラミガキ ○口縁部ヘラミガキ、以下指ナデ	○口縁端面ヨコナデ、刷毛目、頸部はヘラミガキ。 ○口縁部は横方向の刷毛目、頸部は縦方向のヘラミガキ	ヨコナデ
肩 胴 部	形態	肩が大きくはる。	球形に近い胴部	
	文様	頸胴部間に段、段の下に3本の沈線、ヘラによる重弧文		
	整形 (外) (内)	○横方向にヘラミガキ ○刷毛目	○刷毛目の後ヘラミガキ	○縦方向の刷毛目 ○指圧痕が残る。
底部	不明	外面ヘラケズリ	不明	
色調	こげ茶	(外)茶褐色 (内)淡茶褐色	(外)淡褐色 (内)褐色	
胎土質	1~3%の砂粒及び雲母を含む。	1~3%の砂粒及び雲母少量の含有。	1~5%の砂粒多し、雲母含有。	
備考	口縁部に炭付着か?	胴部に黒斑	外面1%の厚みで炭化物付着。	

土器番号		18	19	20
種類		甕	甕	甕
法 量 (cm)	口径	23.0	23.7	24.0
	器高	不明	不明	不明
	腹径	20.8	22.1	23.0
	底径	不明	不明	不明
出土地点		14 層	14層下部	14 層
口 頸 部	形態	07と同じ	07と同じ	07と同じ
	文様	口縁端面に刻み目、頸部に1条のヘラ描沈線	口縁端面に刻み目、頸部に3条のヘラ描沈線	09と同じ
	整形 (外) (内)	○刷毛目の後ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
肩 胴 部	形態	倒鐘形の胴部をもっと思われる。	08と同じ	08と同じ
	文様			
	整形 (外) (内)	○ヘラミガキ、刷毛目が消えずに部分的に残る。 ○未整形の為かザラザラである。	○ヘラミガキ ○磨滅の為不明。	○ヘラミガキ ○未整形の為かザラザラである。
底部		不明	不明	不明
色調		(外)暗茶褐色 (内)灰褐色	(外)暗茶黒色 (内)灰褐色	(外)暗茶褐色 (内)灰黒褐色
胎土		1~15%の砂粒多し、雲母含有。	3~10%の砂粒を含む。	1~2%の砂粒及び雲母を含む。
質		硬	硬	硬
備考		外面煤付着	外面煤付着	外面煤付着

土器番号	21	22	23	
種類	甕	甕	甕	
法量 (cm)	口径	24.0	20.6	28.1
	器高	不明	不明	不明
	腹径	21.1		26.0
	底径	不明		不明
出土地点	14 層	14 層	12-3 層	
口 頸 部	形態	17と同じ	大きく外反する口縁部	17と同じ
	文様	口縁端面に刻み目、頸部に4条のヘラ描沈線。	口縁端面に刻み目、頸部に幅の広い削り出し突帯、突帯上に1本の沈線を加える。突出部に刻み目を施している様である。	口縁端面に刻み目、頸部に貼付突帯。
整形 (外) (内)		ヨコナデ	○磨減の為不明 ○ヨコナデ	○ヨコナデ(一部ヘラミガキ) ○横方向のヘラミガキ
肩 刷 部	形態	18と同じ	腹径は口径に近くなると思われる。	18と同じ
	文様			
整形 (外) (内)		○ヘラミガキ ○細かい刷毛目	○磨減の為不明 ○横方向のヘラミガキ	○刷毛目 ○ナデ
底部	不明	不明	不明	
色調	暗茶褐色	(内)灰褐色	(外)淡茶褐色 (内)灰褐色	
胎土質	1~5%の小石(白)及び雲母を含む。 硬	5~20%の砂粒及び雲母を含む。 硬	1~2%の砂粒、雲母を含む。 硬	
備考	外面及び口縁部内面に煤付着。 内面腹面以下に炭化物付着。		黒斑有	

土器番号	24	25	31	
種類	甕	甕	甕	
法 量 (cm)	口径	14.4	19.2	24.4
	器高	不明	不明	36.5
	腹径	12.4	16.4	27.3
	底径	不明	不明	8.3
出土地点	15~6層	14層	11層	
口 頭 部	形態	17と同じ	17と同じ	円弧を描くように外反する。
	文様	口縁端面に刻み目、頸部に2条のヘラ描沈線めぐらし沈線間に刺突文。	口縁端面に刻み目、頸部に幅の広い削り出し突帯、突帯上に2条のヘラ描沈線。	口縁上端にや、大きく、整った刻み目。
頸 部	整形(外)	○指ナデ	○ヨコナデ	○刷毛目
	(内)	○ヨコナデ	○指押え	○口縁部横方向の刷毛目、以下縦方向のヘラミガキ
肩 部	形態		18と同じ	腰はあまり張り出さず、なだらかなカーブを描いて底部に続く。
	文様			
底 部	整形(外)	○ヘラミガキ	○細かい刷毛目	○刷毛目
	(内)	○磨減の為不明	○刷毛目か?	○ヘラミガキ
底 部	不明	不明	平底	
色 調	(外)黒褐色 (内)茶褐色	(外)褐色 (内)橙褐色	(外)褐色 (内)淡褐色	
胎 上	1~3%の砂粒及び雲母を含む。	1~3%の砂粒及び雲母を含む。	微砂粒混入、雲母少量含有。	
質	硬	軟	硬	
備 考	外面に炭付着	内外面炭付着	全面に炭付着、特に胴部中頃に多くつく。	

土器番号	32	33	土器番号	10	26
種類	甕	甕	種類	鉢	鉢
法 量 (cm)	口径	14.5	口径	8.4	27.9
	器高	20.6	器高	6.5	不明
	腹径	14.3	腹径		25.5
	底径	5.2	不明	底径	5.8
出土地点	11 層	8層溝1	出土地点	15-6層	12-3層
口 部	形態	口縁部が斜め上方に外反する。	形態	直口の口縁を持ち、底部から外へ向けてや、外弯気味に立ちあがる。	外反する口縁部をもつ。
	文様	口縁端面に割み目。	文様		
部	整形(外)	○ヨコナデ	整形(外)	○口縁部はナデ	○刷毛目の後ヨコナデ。
	整形(内)	○横方向の刷毛目			
肩 部	形態	倒鐘形をなし、腹径は口径を凌がない。	形態	腹径は口径をわずかに凌ぐ。	
	文様		文様		
部	整形(外)	○縦方向の刷毛目	整形(外)	○叩き ○指押え(粘土のつき目が残る)	○ナデ
	整形(内)	○ナデ			
底部	平底	小さな平底になると思われる。	底部	未整形の平底	不明
色調	(外)赤褐色 (内)茶褐色	灰褐色	色調	緑茶褐色	(外)暗茶褐色 (内)茶褐色
胎土質	1~3%の砂粒及び雲母を含む。 硬	1~2%の砂粒を少量含む。 硬	胎土質	1~5%の小石及び雲母を含む。 硬	1~2%の砂粒及び雲母多量に含有。 硬
備考	外面底部から腹部にかけて炭附着。 内面下半に炭化物	外面に黒色塗貨物及び炭附着	備考		

土器番号	27	28	土器番号	29	30
種類	鉢	鉢	種類	台付鉢	高杯
法 量 (cm)	口径	27.9	口径	25.2	27.4
	器高	不明	器高		
	腹径	25.5	脚高	不明	不明
	底径	不明	脚径		
出土地点	12~3層	14層	出土地点	8層	Pit 2
形態	外反する口縁部	外反する口縁部	形態	口縁端面が内側へ肥厚する。	口縁部に幅広い水平線をもうけ、その端面は曲折して垂れ、内端に1条の突帯をめぐらす。
文様		口縁端面に板状のものによる刻み目、頸部に2条のヘラ描沈線	文様	4本の凹線文	口縁垂下部に4個1組の円形浮文。
整形			整形		
(外)	○口縁部ヨコナデ、以下刷毛目の接ナデ	○刷毛目調整 口縁部はヨコナデ	(外)	ヨコナデ	○口縁部上下面ヨコナデ
(内)	○ヨコナデ及び指ナデ	○ヨコナデ 下部は指押え	(内)		○坯部外面ヘラ削りとヘラミガキ ○内面ヘラミガキ
色調	(外)暗茶褐色 (内)茶褐色	(外)灰褐色 (内)暗褐色	色調	赤褐色	(上面)風色 (下面)橙色
胎土質	1~2%の砂粒及び多量の雲母を含む。 硬	2~20%の砂粒(白)を含む。 や、軟	胎土質	2~4%の小石を含む。 軟	微砂粒を含む。 や、軟
備考			備考		

瓜生堂遺跡

土器番号	1	2	3	
種類	壺	壺	壺	
法量 (cm)	口径	21.0	16.5	
	器高		不明	
	腹径	不明	22.8	
	底径		不明	
出土地点	No.1 トレンチ 15層溝中	No.1 トレンチ15層黒色落込み	No.2 トレンチ 16-7層	
口 頸 部	形態	頸部から口縁部にむかって斜めにひろがり、口縁端部は下方に折れ曲る。	(1)と同じ	短い頸部に水平に曲がる口縁部がつく。
	文様 整形 (外) (内)	口縁端部に稜状文頸部に直線文 2帯と稜状文 ○文様間を研磨 ○ナデ	口縁端部に波状文、刺突文 頸部に波状文 ○ナデ ○ヨコナデ	○口縁部ヨコナテ頸部縦方向の ヘラミガキ。 ○ヨコ方向のヘラミガキ、内外 面とも指圧痕が残る。
肩 部	形態			丸くはり出す。
	文様 整形 (外) (内)	肩部に稜状文 ○文様間を研磨 ○ナデ	不明	○縦方向のヘラミガキ ○刷毛目
底部	不明	不明	不明	
色調	淡茶褐色	淡茶褐色 (赤っぽい)	淡茶褐色 (緑っぽい)	
胎土	2~3%の砂粒及び雲母を含む。	1~3%の砂粒及び少量の雲母 を含む。	1%程度の砂粒雲母を含む。	
質	硬	硬	硬	
備考			胴部に黒斑煤付着	

土器番号	4	5	6	
種類	壺	壺	壺	
法 量 (cm)	口径	21.5	17.1	17.2
	器高	不明		
	腹径	32.2	不明	不明
	底径	8.9		
出土地点	No.1 トレンチ 14-5 層	No.1 トレンチ 14-5 層	No.2 トレンチ 16-7 層	
口 頭 部	形態	(3)と同じ、口縁端部は上方に肥厚する。	(1)と同じ	頭部から口縁部にむけて斜めにひろがり、口縁端部は下方に折れ曲がる。
	文様	口縁水平面に御指列点文、口縁端面に波状文、頸部に波状文と直線文		口縁端面及び頸部に波状文。
	整形 (外) (内)	○ナデ ○ヨコナデ	○口縁端部ヨコナデ、頭部ヘラミガキ ○よこなでとヘラミガキ	○文様間を研磨 ○ナデ
肩 部	形態	丸くはり出す。		
	文様	波状文4帯、その間に直線文3帯。		頭部からの波状文が続く。
	整形 (外) (内)	○文様下縦方向のヘラミガキ ○荒い刷毛目	○縦方向のヘラミガキ ○縦方向横方向文1/2のヘラミガキ	○文様間を研磨 ○ナデ
底部	ナ デ	不明	不明	
色調	赤白色	淡茶褐色 (や・緑っぽい)	(外)茶褐色 (内)黒褐色	
胎土 質	1~2%の砂粒混入、雲母も若干含有。 や・軟	1~3%の砂粒及び雲母を含む。 硬	雲母混入 硬	
備考	胴部下半に黒斑、底部から腹部中央にかけて煤付着		外面煤付着	

土器番号	7	8	9	
種類	壺	壺	壺	
法 量 (cm)	口径	14.5	14.1	
	器高		33.9	
	腹径	不明	31.6	
	底径		7.9	
出土地点	No.2 トレンチ 16~7層	No.2 トレンチ 16~7層	No.1 トレンチ15層下部黒色層うち込み	
口 頸 部	形態	○短い頸部がや、外向いて立ち水平に近く折れ曲がる口縁部がつく。口縁端は上小に小さく突出する。口縁部水平面に2孔1対の紐孔をもつ。焼成前に内から外へあけているが、粘土を押し切れずふきがつている孔もある。裝飾的要素が強いのか？	○短い頸部がや、外向いて立ち水平に近く折れ曲がる口縁部がつく。口縁端は上下方に小さく突出する。頸部上端に2孔1対の紐孔が2対1組で穿穴される。焼成前に内から外へあけたものである。○口縁端面に2本の凹線	○短くたつ頸部に、水平に折れ曲がる口縁部がつく。端部は下方へ垂れる。 口縁内面に帯描列点文。口縁端面は磨滅の爲不明だが2個1対の円形浮文を貼りつけた痕跡が残る。
	文様 整形 (外) (内)	○口縁端面に3本の凹線 ○ヨコナデ、頸部下端は刷毛目 ○ヨコナデ	○ヨコナデ ○口縁部ヨコナデ、頸部横方向の刷毛目	○刷毛目 ○ナデ
肩 胴 部	形態		腰が中頃で強くはり出す。	
	文様 整形 (外) (内)		頸部外面ヨコナデ後刷毛目を下方から上方へ施している。削きあげられた粘土が頸胴部の境界でとめられ帯状に並んでいる。 縦方向の刷毛目	頸部下端から腰まで波状文を直線文を交互にくり返す。 ○腹部中央刷毛目以下ヘラミガキ ○上半まで下半ヘラケズリ
底部	不明	不明	内面ヘラケズリ	
色調	淡茶褐色	肌色	赤灰色	
胎上	1~2%の小砂及び雲母を含む。	微砂粒、雲母を含む。	1~2%の砂粒を多量に含む。雲母若干混入。	
質	や、軟	や、硬	軟	
備考	外面窯付着	黒斑	胴部に黒斑	

土器番号	10	11	12
種類	小型鉢	小型鉢	台付鉢
法 量 (cm)	口径	7.0	12.0
	器高	6.7	6.6
	腹径		
	底径	3.8	5.5
出土地点	No.2 トレンチ 16-7層	No.1 トレンチ15層溝中	No.2 16-7層
形態	内湾気味の器体に外反する口縁部がつく。	碗状の器体に直口の口縁部がつく。	腰に鈍い稜をもち、内方にやや傾斜して立つ段状の口縁部をもつ。
文様	口縁内外面に刻み目。		口縁端面に帯描列点文。 以下腹状文、帯描列点文2帯
整形 (外) (内)	口縁部ヨコナデ以下ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ以下ヘラミガキ	口文様下ヘラミガキ 口ヘラミガキ (一部刷毛目が残る) 脚部欠損
底部	ナデ	不整形 底、中央部は窪む	
色調	赤乳色	茶褐色 (緑っぽい)	(外)茶褐色 (内)黒褐色
胎土 質	1%程度の砂粒及び雲母を含む。 硬	1~2%の砂粒を少量含む、雲母は多量に含有。 硬	1~2%の小石、雲母を多量に含む。 硬
備考		底部に黒斑	

土器番号	13	14	15	
種類	高 環	高 環	高 環	
法 量 (cm)	口径	18.7	29.3	25.8
	器高		8.9(環高)	
	脚径	不 明	不 明	不 明
	脚高			
出土地点	No.2 トレンチ 16~7 層	No.2 トレンチ 16~7 層	No.2 トレンチ 16~7 層	
杯 部	形態	直口の高環である。 口縁部が内方へ肥厚する。	13と同じ	腰に稜を持ち、口縁端面は内へ 少し肥厚する。
	文様	口縁端面に凹線か? 1 周しない。	口縁下に凹線	凹線文
	整形 (外)	○ヨコナデ、下半ヘラミガキ	○口縁部ヨコナデ、以下、上半水 平方向のヘラミガキ、下半縦 方向のヘラミガキ	○ヘラミガキ
(内)	○横方向のヘラミガキ、以下縦 方向のヘラミガキ。	○口縁部ヨコナデ以下ヘラミガキ	○ヨコナデとヘラミガキ	
脚 部	形態			
	整形 (外)	不 明	不 明	不 明
(内)				
色 調	茶褐色	艶やかな光沢のある黒褐色 (外面下半に黄褐色の部分がある)	黄褐色	
胎 土	1%程度の砂粒及び雲母を含む。	雲母を含む。	精 良	
質	硬	硬	や、軟質	
備 考		精緻な土器である。	口縁部に黒斑	

土器番号	17	18	19	
種類	無頭壺	細頭壺	細頭壺	
法 量 (cm)	口径	13.9	不明	
	器高	不明		
	腹径	23.4	不明	
	底径	6.5	29.3	
出土地点	No.1 トレンチ 15層海中	No.2 トレンチ 16~7層	No.2 トレンチ 16~7層	
口 頭 部	形態	段状の口縁部	頭部が細くしまり、少し広がって口縁部付近で内湾する。端面は少し肥厚する。	細くしまった頭部が斜めに広がっている。口縁部の形態は不明
	文様	口縁部下に2孔1対の縦孔	環状文をはきんで上下方は太い凹線文、口縁部上端には凹形浮文が並ぶ。	
	整形部 (外) (内)	磨減の為不明	○ヨコナデ(文様間磨蝕) ○上半刷毛目のあとナデ、下半ナデ、指圧痕が散る。	○ヨコナデ ○ナデ
形態	腰は中程ではり出し丸くカーブを描いて底部に続く。		や、腰の張った卵形をなす。	
胴 部	文様	磨減が甚しく良くわからないが口縁下から数帯の環状文を施していると思われる。	不明	頭部直下から直線文を波状文を交互にくり返す。
	整形部 (外) (内)	○縦方向にヘラミガキ ○刷毛目		○文様下、縦方向にヘラミガキ ○胴部、ナデ、胴部刷毛目
底部	内面指ナデ	不明	ナデ	
色調	黄褐色	茶褐色	(外)赤みがかった黄褐色 (内)灰褐色	
胎度	1%程度の砂粒を含む。	1~2%弱の砂粒及び雲母を含む。	1~2%の砂粒を含む。	
質	軟	硬	や、硬	
備考			底部は胴部にかけて煤付者、黒斑有	

土器番号	20	21	22	
種類	片口の直口壺	甕	甕	
法 量 (cm)	口径	19.5	15.2	
	器高	33.4	不明	
	腹径	26.8	不明	
	底径	6.5		
出土地点	No.1 トレンチ15層下部黒色落込み	No.2 トレンチ16-7層	No.2 トレンチ16-7層	
口 頸 部	形態	頸部からほとんどまっすぐに立ち、口縁端面は内に少し肥厚する。口縁部にくり込みがある。	口縁部は水平に近く折れ曲って端部は丸く終わる。端部は内外面にやや肥厚する。	口縁部は斜めに外反して丸く終わる。
	文様	口縁部に3本の凹線		
	整形 (外) (内)	磨滅甚しく不明	ヨコナデ	ヨコナデ
唇部				
肩 部	形態	球形に近い胴部をもつ。	なだらかなカーブを描く。	なだらかなカーブをもつ、肩はあまりはらない。
	文様			
	整形 (外) (内)	磨滅甚しく不明	ヘラシガキ	○上半部刷毛目、下半はヘラミガキと思われる。 ○刷毛目の後ヨコナデ
底部				
底 部	磨滅の為不明	不明	不明	
色 調	赤白色	黄褐色(外面はやや赤っぽい)	茶褐色	
胎 土 質	1-3%の砂粒多量に含む	2%程度の砂粒及び器母を含む。	微砂粒及び器母共に若干含む。	
	軟	やや硬	やや硬	
備 考	底部から胴下半にかけて黒斑		外面に煤付着	

土器番号	23	24	25	
種類	甕	甕	甕	
法 量 (cm)	口径	15.0	17.7	18.3
	器高	不明		
	腹径	17.5	不明	不明
	底径	不明		
出土地点	No.2 トレンチ 16~7層	No.2 トレンチ 16~7層	No.1 トレンチ 15層下部溝中	
口 頸 部	形態	(22)と同じ。	(22)と同じ。	水平に近く斜めに外反し、丸く終わる口縁部
	文様			
	塗彩 (外) (内)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
肩 胴 部	形態	(21)と同じ。	(21)と同じ	なだらかなカーブをえがいて、ややはり出す。
	文様			
	塗彩 (外) (内)	○縦方向のヘラシガキ ○なで	○縦方向のヘラミガキ。 ○刷毛目	○ヘラシガキと思われる。 ○ナデ、指頭圧痕が残る。
底部	不明	不明	不明	
色調	(外)黒色 (内)茶褐色	黒褐色	(外)茶褐色 (内)黒褐色	
胎土質	1%程度の砂粒及び多量の雲母を含む 硬	1~2%の砂粒及び雲母を含む。 硬	2%程度の砂粒及び雲母、共に若干含有 やや硬	
備考	外面に煤、内面に炭化物付着。	外面に煤付着。	外面に煤付着。	

土器番号	26	27	28	
種類	甕	甕	甕	
法	口径	20.8	24.5	15.5
	器高	不明	不明	
量 (cm)	腹径	27.8 25.2	27.6	不明
	底径	不明	不明	
出土地点	No.2 トレンチ 16-7 層	No.2 トレンチ 16-7 層	No.2 トレンチ 16-7 層	
口 頸 部	形態	(22) と同じ 口縁部はや、短い	内面でカーブを描いて斜めに外 反する口縁部で端面は内側にや 、肥厚する。	(22) と同じ
	文様		口縁部内外面に刻み目	
	整形 (外)	ヨコナデ	○ヨコナデ	ヨコナデ
	(内)		○ヨコナデと横方向の刷手目	
肩 胴 部	形態	(21) と同じ	丸くはり出す	(21) と同じ
	文様			
	整形 (外)	○粗雑なヘラミガキ 上部はなでの凹凸が残る。 下半は刷毛目	○縦方向の刷毛目 ○ナデ	○縦方向のヘラミガキ ○ナデ (粘土のつき目が残る)
(内)				
底部	不明	不明	不明	
色調	(外) 黒色 (内) 黒褐色	(外) 茶褐色 (内) 黒褐色	(外) 赤褐色 (内) 灰褐色	
胎土 質	1%程度の砂粒を含む 硬	1%程度の砂粒及び雲母を含む 硬	1%程度の砂粒少量及び雲母を 含む や、硬	
備考	外面全体に1%強の厚さで煤付 着。	外面に煤付着。		

土器番号	29	30	31	
種類	甕	甕	甕	
法 量 (cm)	口径	14.6	14.3	15.7
	器高	不明	不明	不明
	腹径	16.8	17.0	17.7
	底径	不明	不明	不明
出土地点	No.2 トレンチ 16-7 層	No.1 トレンチ 15層溝中	No.1 トレンチ 15層溝中	
口 部	形態	斜めに外反する口縁で端部は少したちあがりをもつ。	(29)と同じ	(29)と同じ
	文様		口縁端面に刻み目 刻み目は1周しない	
	整形 (外) (内)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
肩 部	形態	肩部から丸くはり出し、球形に近い胴部をもつ	(29)と同じ	(29)と同じ
	文様			
	整形 (外) (内)	刷毛目	○上半刷毛目, 下半ヘラケズリ ○上半刷毛目, 下半ナデ	○上半細い刷毛目 下半広い刷毛目 ○ナデ
底部	不明	不明	不明	
色調	(外) 黒褐色 (内) 明茶褐色	(外) 明茶褐色 (内) 茶褐色	(外) 黒褐色 (内) 茶褐色	
胎土質	1%程度の砂粒及び雲母を含む 硬	1~2%の砂粒, 雲母共に少量含有 硬	1~2%の砂粒, 雲母共に少量含有 硬	
備考	外面煤付着	外面煤付着, 内面胴部下半及び口縁部たちあがりの部分に炭化物付着。	外面煤, 内面下半炭化物付着。	

土器番号	32	33	34	35	
種類	甕	甕	甕	甕	
法 量 (cm)	口径	18.0	13.4	12.5	14.1
	器高	不明	不明	不明	不明
	腹径	19.6	16.1	16.2	17.4
	底径	不明	不明	不明	不明
出土地点	No.2 トレンチ 16~7層	No.2 トレンチ 16~7層	No.2 トレンチ 16~7層	No.2 トレンチ 16~7層	
口 頸 部	形態	水平に近く斜めに外反する口縁で、端部は下方へ肥厚する。	斜めに外反する口縁で、端部は上方内側に向けて立ちあがりをもつ	斜めに外反する口縁で、端部は内方へ少し肥厚する。	斜めに外反する口縁で、端部は少し立ちあがりをもち、外面はや、肥厚する。
	文様	口縁端面に凹様			
	整形(外) (内)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
肩 部	形態	(21) と同じ	(21) と同じ	(21) と同じ	(29) と同じ
	文様				
	整形(外) (内)	○刷毛目、残存部が少なく明確でないが下半はハラケズリか？ ○刷毛目	○上半刷毛目、以下ハラケズリか？ ○刷毛目の後ナデ	○叩き、肩部に文様風の規則的な刷毛目がある。 ○刷毛目	○刷毛目、肩部下半縦方向のハラミガキ ○刷毛目
底部	不明	不明	不明	不明	
色調	淡茶褐色	(外) 黒色 (内) 茶褐色	(外) 灰褐色 (内) 淡茶褐色	(外) 黒褐色 (内) 茶褐色	
胎土	雲母を含む。	雲母を含む	雲母を含む	1%程度の砂粒及び雲母を含む	
質	硬	硬	や、軟	硬	
備考		外面全体に厚く煤付着 内面とくにたちあがり部分に炭化物	外面一部煤付着	外面煤付着、内面は特にたちあがり部分に炭化物	

土器番号	36	37	38	39	
種類	甕	甕	甕	甕	
法 量 (cm)	口径	13.7	15.5	19.7	16.3
	器高				不明
	腹径	不明	不明	不明	22.4
	底径				不明
出土地点	No.2 トレンチ 16~7 層	No.1 トレンチ 15層溝中	No.2 トレンチ 16~7 層	No.2 トレンチ 16~7 層	
口 頸 部	形態	(29) と同じ	口縁は水平に近く折れ曲がり、端部は上方へ丸くたががる。外面はや、肥厚する。	斜めにひらく口縁部端面はたちあがりをもつ	(35) と同じ
	文様	口縁端面に凹椋		口縁端面に凹椋及び刻み目	口縁端面に凹椋文
	整形 (外) (内)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
肩 胴 部	形態	(21) と同じ	(21) と同じ	(21) と同じ	(29) と同じ
	文様				胴部中頃に刻み目
	整形 (外) (内)	○水平方向の細かい叩きの後、縦方向の刷毛目 ○刷毛目	刷毛目	○ヘラミガキと思われる。 ○刷毛目の後ナデ	○叩き、下半はヘラミガキ ○刷毛目の後ナデ
底部	不明	不明	不明	不明	
色調	(外) 赤~茶褐色 (内) 茶褐色	黄褐色	茶褐色	(外) 黒褐色 (内) 茶褐色	
胎土質	2%程度の砂粒及び雲母を含む。 硬	雲母少量混入 軟	1%程度の砂粒及び雲母共に少量含有 硬	1%程度の砂粒及び雲母共に少量含有 や、硬	
備考	外面一部煤付着	外面に煤付着	外面全体に煤付着	外面に煤付着内面は炭化物付着	

巨摩鹿寺跡

土器番号	1	2	3	
種類	甕	甕	甕	
法 量 (cm)	口径	13.2	14.6	16.5
	器高	約21.3	不明	不明
	腹径	17.8	19.2	19.2
	底径	4.0	不明	不明
出土地点	13~4 層	16層	13~4 層	
口 頸 部	形態	内面に紐をもって外反する口縁部で、狭い端面をもつ	大きく外反する短い口縁部下方へ少し拡張し、上端は内へや、肥取する。	短く立つ頸部に、外反する口縁部をもつ。 口縁部は内外からなであげられてたちあがる。
	文様		口縁端面に凹線文	
	盤形 (外) (内)	○縦方向の刷毛目 ○横方向の刷毛目	ヨコナデ	ヨコナデ
肩 胴 部	形態	上腹部ではり出し、小さな底部へ向けてすぼまってゆく器形である。	胴部は強はり出す。	球形に近い器体になると思われる。
	文様		板状のものによる刻み目。	
	盤形 (外) (内)	○甲きの後刷毛目、下部は消えている。 ○上半は粘土のつきめが顕著に残る。 ○下半 ヘラケズリ	○刷毛目、下半はヘラミガキ ○ヘラケズリ	○甲き（一部は交差している） ○刷毛目、粘土のつきめが顕著に残る。
底部	輪状の底部で中央部は窪む。	不明	不明	
色調	淡茶褐色	黄褐色	(外) 赤っぽい褐色 (内) 灰褐色	
胎土質	1~2%の砂粒及び雲母を含む。 や、硬	1~2%の砂粒及び雲母を含む。 硬	1~2%の砂粒及び雲母共に多量含有 硬	
備考	外面に煤付着	下腹部に黒斑	外面煤付着	

土器番号	4	5	6	
種類	長頸壺	壺	長頸壺	
法 量 (cm)	口径	11.4	12.1	
	器高	22.4	22.7	
	腹径	17.4	19.0	
	底径	3.6	4.9	
出土地点	13~4 層	13~4 層	14~16層	
口 頸 部	形態	斜め上方にや、開く口頸部	外反してひらく口頸部は比較的短い。	筒状の長い頸部に大きく折れ曲がる口縁部がつく。
	文様			
	整形(外)	刷毛目	○口縁部ヨコナデ 頸部ヘラミガキ	○口縁部ヨコナデ 頸部縦方向の刷毛目後広いヘラミガキ
	(内)		○ヨコナデ	○横方向の刷毛目後広いヘラミガキ
肩 胴 部	形態	無果花形に近い器体をもつ。全体に器壁は薄い。	胴長のさぐりの高いところで張りをもつが、腹径は器高に及ばない。	不明
	文様			
	整形(外)	○上半横方向のヘラミガキ 下半縦方向のヘラミガキで叩きの痕跡が残る。	○縦方向のヘラシガキ	不明
	(内)	○刷毛目の後ナデ	○ナデ	
底部	底部は小さく外面はなでているが、内面では外周に指押えによる窪みが明瞭。	突出気味の底部 側面はヨコナデ	不明	
色調	茶褐色	淡茶褐色 (内面は緑っぽい)	赤っぽい茶褐色	
胎土質	1~2%の砂粒少量及び雲母多量含有。 硬	1~3%の砂粒、雲母共に多量含有。 や、硬	1~3%の砂粒及び雲母多量に含有。 硬	
備考				

土器番号	7	8	9	
種類	長頸壺	壺	短頸壺	
法 量 (cm)	口径	14.9	10.0	
	器高 (頸部高) 16.1	20.1	約22.5	
	腹径	不明	16.7	
	底径	不明	4.7	
出土地点	17層	13~4層	16層	
口 頸 部	形態	や・開き気味の長い筒状の頸部に外反する口縁部がつく。口縁端部は内外に肥厚する。	外反して開く口頸部であるが、開きはあまり大きくない。	垂直に立つ頸部にや・開く口縁部がつく。
	文様 整形 (外) (内)	○口縁部ヨコナデ 頸部ヘラシガキ (刷毛目が残る部分がある) 口縁部ヨコナデ ○頸部上半は横方向の刷毛目 下半は束整形粘土のつき目及び指頭圧痕が顕著に残る。	口縁端面に2本の凹線 ○口縁部から頸部上半ヨコナデ 頸部下半刷毛目 ○刷毛目	○口縁部ヨコナデ、頸部縦方向の刷毛目の上一部ヨコナデ ○ヨコナデ
肩 胴 部	形態	不明	上腹部が張っているが、張りは小さく腹径は器高に及ばない。	上腹部でや・張る丈高の器体である。
	文様 整形 (外) (内)		刷毛目	○刷毛目 ○刷毛目の後上半はヘラシガキ
底部	不明	側面に指頭圧痕 底は外周から内へなでている。	不明	
色調	淡茶褐色	赤っぽい淡茶褐色	黄褐色	
胎土 質	1~2%の砂粒及び雲母を含む。 硬	1~2%の砂粒少量及び雲母を含有 硬	1~2%の砂粒、雲母共に少量含有 硬	
備考		胴部に黒斑	頸部から胴部にかけて黒斑又、反対側胴下半に黒斑。	

新家遺跡

土器番号		1	2	3
種類		杯蓋	杯蓋	杯蓋
法 尺 寸	口径	11.7	11.5	12.3
	器高	4.0	4.1	4.3
口 縁 部	<p>垂直にたつ。端部外面はや、肥厚し、水引きの際の指頭による窪みが見られる。下面に段状の内傾斜面をつくる。内傾斜面と内面との間は稜線を示す。上部は大きく内湾し天井部との境界は明瞭な稜線をなす。</p>	<p>垂直にたち、下面は鋭い凹線をめぐらした内傾斜面をもつ。端面は丸い。内傾斜面と内面との間は明瞭な稜線を示す。上部は鋭く内湾し天井部との境界は明瞭な稜線をなす。</p>	<p>垂直にたち、下面に内傾斜面をつくる。内傾斜面と内面との間は明瞭な稜線を示す。上部は少し内湾し、天井部との境界は明瞭な稜線をなす。</p>	
天 井 部	<p>稜線直上が少し凹湾したのち、内湾してや、扁平な天井部を形成する。比較的丁寧なヘラ削りを施している。ろくろの回転方向は逆まわりである。</p>	<p>稜線直上が少し凹湾した後、なだらかな弧を描いて天井部を形成する。あまりふくらまない。非常に丁寧なヘラケズリを施している。ろくろの回転方向は逆まわりである。</p>	<p>稜線直上で明瞭な窪みをもって後、なだらかな弧を描いてや、窪み気味の上端に続く。凹湾後すぐまで鋭いヘラ少ズリを施している。ろくろの回転方向は逆まわりである。</p>	
色 調	青灰色	明灰色	青灰色	
胎 土 質	<p>良好、2%程度の砂粒を含む。 堅 緻</p>	<p>精良、1～2%の砂粒を少量含む。 堅 緻</p>	<p>良質、1～3%の砂粒を含む。 堅 緻</p>	
備 考	外面灰白色の自然釉付着。	精緻なつくりである。	天井部外面に自然釉付着。	

土器番号		4	5	6
種類		坏 蓋	坏 蓋	坏 蓋
法量 (cm)	口径	11.1	11.6	12.4
	器高	4.4	不明	不明
口 縁 部		垂直にたち、端部外面がや、肥厚する口縁で、下面に段状の内傾斜面をつくる。内傾斜面と内面との間は明瞭な稜線を示す。上部は大きく内反し、天上部との境界は明瞭な稜線をなす。また内面に於ても天井部との境界で角度をもつ。	垂直にたち、端部外面がや、肥厚する口縁で、下面に鈍い段状の内傾斜面をつくる。内傾斜面と内面との間は明瞭な稜線を示す。上部は少し凹弯し天井部との境界は明瞭な稜線をなす。	垂直にたち、端部外面は著しく外反する。下面は鋭い凹線をめぐらした内傾斜面をもつ。内傾斜面と内面の間は明瞭な稜線を示す。上部は内弯し、天井部との境界は明瞭な稜線をなす。
天 井 部		稜線直上で明瞭な窪みをもって後や、扁平な天井部を形成するヘラ削りは荒い。中央部内面にみずびき痕が顕著である。ろくろの回転方向は逆まわりである。	稜線直上で明瞭な窪みをもって後ならかな弧を描く。おそらく丸い天井部になると思われる。丁寧なヘラケズリが施されている。	稜線直上からならかな弧を描く。ヘラケズリの範囲は比較的狭く水びき痕が残る。
色 調		青灰色	明灰色	(外) 暗灰色 (内) 青灰色
胎 土 質		良質、1~3%程度の砂粒を含む。 堅 緻	精良、1~3%程度の砂粒少量含む。 や、軟弱	良質、1~3%程度の砂粒少量含む。 堅 緻
備 考		黒点有り、又天井部上端にヘラ記号がある。	天井部外面に黒点有り。	外面自然軸付着

土器番号	7	8	9	
種類	環身	環身	環身	
法尺 (cm)	口径	10.2	10.8	10.6
	器高	4.9	5.1	5.0
タ チ ア ガ リ	タチアガリは高く、内傾度は小さい。上面に段状の狭い内傾斜面を形成する。内傾斜面とタチアガリ内面との境は明瞭な稜線を示す。	(7)と同じ 外面に引きの際の指頭による凹みがみられる。	タチアガリは高く内傾する。上面に、鋭い凹線をめぐらした内傾斜面を形成する。端部外面はや・肥厚する。内傾斜面とタチアガリ内面との境は稜線を示す。	
受 部	水平に近く直線的にのびる。 下面は肥厚する。	水平に近く直線的にのびる。 下面はや・肥厚気味である。	水平に近く直線的にのびる。 肉厚はや・厚い。	
受 体 底 部	上端で凹弯後、全体に丸味を帯びた体底部を形成する。外面は非常に丁寧なヘラケズリを行なっている。内面タチアガリと体部との境は稜線を示す。 ろくろの回転方向は時計まわりである。	上端で凹弯後全体に丸味を帯びた体底部を形成する。外面は劣程度にヘラケズリを行なっているが、ケズリは粗雑で二度行ない途中はとんでいる。内面タチアガリと体部との境は稜線を示す。水引きの際の指頭による凹みが顕著である。 ろくろの回転は逆まわりである。	上端で凹弯後全体に丸味を帯びた体底部を形成する。外面は劣程度にヘラケズリを行なっている。内面タチアガリと体部との境は明瞭な稜線を示す。 ろくろの回転は時計まわりである。	
色 調	(外) 暗灰色 (内) 明灰色	灰 色	(外) 青灰色 (内) 明灰色	
胎 土 質	精良、2～3%の砂粒若干含む 堅 緻	良質、1～3%の砂粒を含む 堅 緻	良質、1～2%の砂粒を含む 堅 緻	
備 考	底部外面に黒点有り。 精緻な作りである。			

土器番号	10	11	12	
種類	坏身	坏身	坏身	
法量 (cm)	口径	10.4	10.7	10.4
	器高	5.3	5.2	約 4.5
タ チ ア ガ リ	タチアガリは高く、内傾する。上面に鋭い段状の、内傾斜面を形成する。端部外面はや、肥厚し、水引きの際の指頭による凹みがある。内傾斜面とタチアガリ内面との境は稜線を示す。	タチアガリは高く、内傾する。上面に狭い内傾斜面を形成する。内傾斜面はなでられており、段は意識されていない。内傾斜面とタチアガリ内面との境は稜線を示す。	タチアガリは高く、や、内傾する。上面に、鋭い凹線をめぐらした内傾斜面を形成する。内傾斜面とタチアガリ内面との境は明瞭な稜線を示す。	
受 部	タチアガリとの間に凹みをもち、や、上方にのびる。肉厚は厚い。	や、上方にのびる。下面は肥厚しない。	(7)と同じ	
体 底 部	上端で凹弯後全体に丸味を帯びた体底部を形成する。外面は6%程度に粗雑なヘラケズリを行っており、下端にヘラオコシの痕跡が残る。内面底は肥厚する。ろくろの回転方向は、時計まわりである。	上端でゆるやかに凹弯後、全体に丸味を帯びた底部を形成する。外面は6%程度に粗雑なヘラケズリを行っている。下端にヘラオコシの痕が残る。ろくろの回転方向は時計まわりである。	上端で凹弯する。体部と底部の境は稜をなきない。下面はや、平らになると思われる。外面は6%程度にヘラケズリが施されている。内面中央部に、水引きの際の指頭による凹みが顕著である。ろくろの回転方向は逆まわりである。	
色 調	灰 色	外面受部以下：暗灰色 内面と外面受部以上：明灰色	明灰色	
胎 土 質	や、粗、1～4%の小石を含む 堅 緻	良質、1～3%の砂粒含む 堅 緻	精良、1～2%の砂粒若干含む 堅 緻	
備 考		内面と外面受部以上に自然釉付着。重ね焼きの痕跡が明瞭である。		

土器番号	13	15	17	
種 類	蓋	蓋	蓋	
法 尺 器高	口径	12.4	12.0	11.4
	器高	5.0	4.9	5.5
口 縁 部	やや開いてたち、下端で外反する。端部外面に、水引きの際の指頭による凹みが見られる。下面に段状の内傾斜面をつくり、内面との境は明瞭な稜線を示す。上部は内湾し、天井部との境界は明瞭な稜線をなす。	垂直にたつ。端部外面は肥厚し、水引きの際の指頭による凹みが見られる。下面に段状の内傾斜面をつくる。内傾斜面と内面との境は稜線を示す。上部は内湾し、天井部との境界は明瞭な稜線をなす。	垂直にたち、下端で外反する。下面に段状の内傾斜面をつくる。内傾斜面と内面との境は明瞭な稜線を示す。端部内外面ともに水引きの際の指頭による凹みが見られる。上部は内湾し、天井部との境界は明瞭な稜線をなす。	
天 井 部	天井部はあまり丸くなく中央部につまみを貼りつけている。つまみは中窪みで外縁の断面は丸い。外面はつまみのまわりに広いヘラケズリを行なっている。内面には水引きの際の指頭による凹みが顕著である。ロクロの回転方向は逆まわりである。	稜線直上で少し凹湾してのち、扁平な天井部を形成する。中央部につまみを貼りつけている。つまみは中央部が大きく窪み、外に稜線がつく。外面は広いヘラケズリを行なっており、つまみ接合の痕跡が残る。ロクロの回転方向は時計まわりである。	稜線直上で少し凹湾してのち丸い天井部を形成する。中央部につまみを貼りつけている。つまみは内周が窪み、外縁の断面は丸く、口径に比して大きい。外面はヘラケズリを行なっており、内面には水引きの際の指頭による凹みが顕著である。ロクロの回転方向は逆まわりである。	
色 調	(外) 灰紫色 (内) 青灰色	青灰色	青灰色	
胎 土 質	良質3～5%の砂粒を含む。 堅 緻	良質10%の小石を含む。 堅 緻	極上、1%程度の砂粒を含む。 堅 緻	
備 考			外面ヘラケズリの部分に黒点がとぶ。	

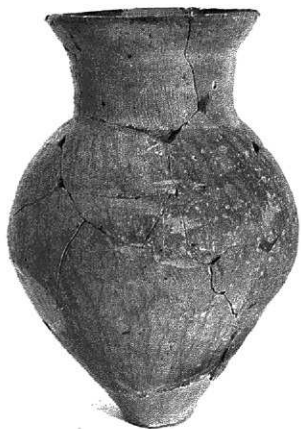
土器番号	19	土器番号	14	土器番号	16
種類	蓋	種類	有蓋高坏	種類	有蓋高坏
法址 図	口径	11.7	法 尺	口径10.8 脚径 7.9	口径 10.5
	器高	5.6	(cm)	器高 9.2 脚高 4.2	杯高 4.5
口 縁 部	(14)と同じ	環 部	<p>タチアガリは高く、内傾斜度は小さい。端部は外反し、外面に水びきの際の指頭による凹みが見られる。上面に段状の内傾斜面を形成し、内傾斜面とタチアガリ内面との境は明瞭な稜線を示す。受部は上がり気味に直線的にのびる。</p> <p>底部は丸味を帯びている。外面へラケズリの範囲は小さい。内面タチアガリと体底部の境は鈍い稜線を示す。中央部はよこなでにより水びきの痕跡を消している。</p>	<p>タチアガリは高く、内傾斜度は小さい。端部外面はやや肥厚する。上面に段の退化気味の内傾斜面を形成し、内傾斜面とタチアガリ内面との境は鈍い稜線を示す。受部はタチアガリとの間に小さな窪みをもって水平に近く直線的にのびる。</p> <p>受部下面はやや肥厚し、凹窪の後、弧を描いてふくみの少ない底部を形成する。外面は底部の寸程度にへラケズリを行なっている。内面は凹凸が少ない。ろくろの回転方向は時計まわりである。</p>	
天 井 部	やや扁平な天井部で、中央部に中窪みのつまみを貼りつけている。外面は広いへラケズリを作っている。内面、口縁部との境は鈍い稜線を示し、水引きの際の指頭による凹みが顕著である。ロクろの回転方向は時計まわりである。	脚 部	脚高は低く基部から脚端へ外反しつつ広がる。端部で段をなす。長方形透孔が三方に開く。	外面はかき目調整を施している。長方形透孔が三方に開くと思われる。	
色 調	灰紫色	色 調	青灰色	灰 色	
胎 土 質	良質 2～3%の砂粒を含む。 堅 緻	胎 土 質	良質、2～4%の砂粒を含む。 堅 緻	粗、1～2%の砂粒を若干含む。 堅 緻	
備 考	表面に、自然釉が付着し、さらに一部は剝離している。重ね焼きの痕跡がある。	備 考	脚部にカーボン。	外面一部にカーボン。	

土器番号	18	20	21
種類	有蓋高坏	有蓋高坏	無蓋高坏
法量 (cm)	口径 10.4 脚径 6.4 器高 6.6 脚高 2.4	口径 9.5 脚径 8.6 器高 8.6 脚高 4.4	口径 14.4 杯高 5.2
坏部	<p>タチアガリは高くや・内傾する。狭い内傾斜面をもつ。内傾斜面とタチアガリ内面との境は鈍い稜線を示す。</p> <p>水平に近くびのびる。比較的短い受部をもつ。</p> <p>受部下で凹湾したのち弧を描いてふくらみの少ない底部を形成する。外面は底部の寸程度にヘラケズリを行っている。内面はタチアガリと体底部との境に鈍い稜線を示し、水びきの際の指頭による凹みが顕著である。</p>	<p>タチアガリは高く、や・内傾する。鈍い段状の狭い内傾斜面をもつ。内傾斜面とタチアガリ内面との境は鈍い稜線を示す。</p> <p>受部は水平に近く外反気味にのびる。</p> <p>受部下で凹湾したのち、偏平な底部を形成する。外面ヘラケズリつけの後行なっている。内面は、タチアガリと体底部との境で稜線を示し、水引きの際の指頭による凹みが顕著である。</p> <p>タチアガリから体部にかけて肉厚は非常に薄く底部は厚い。</p> <p>ロクロの回転方向は逆まわりである。</p>	<p>口縁部は外反気味にひらき、端部は断面鋭角を呈している。</p> <p>口縁部と底部は2本の突条によって区分される。</p> <p>突条以下弧を描いてや・浅い底部を形成する。外面のヘラケズリは鋭い。</p> <p>下段の突条の直下には指圧痕が残る。</p> <p>ロクロの回転方向は逆まわりである。</p>
脚部	<p>基部は細く、脚高は非常に低い。基部直下でや・外反したのち、内弯気味に拡がる。端部は内外に肥厚し、稜線をもって、内傾する面を形成する円形透孔が、三方に開く。</p>	<p>脚高は低く、基部から脚端へ外反しつつ拡がる。端部は段状で縁端は内外からなで丸く仕上げられている。</p> <p>内面上端に脚部貼りつけの痕跡が残る。</p> <p>長方形透孔が三方に開く。</p>	欠損の為不明
色調	青灰色	灰紫色 (破片断面淡紫色)	灰紫色
胎土	良質、2～4%の砂粒を含む。	良質、1～2%の砂粒を含む。	精良、1～4%の砂粒を含む。
質	堅緻	堅緻	堅緻
備考	ヘラケズリ部分に黒点がとぶ。	外面に自然釉が認められ又表面割離部分有り。	

土器番号	22	23	土器番号	24
種類	無蓋高杯	無蓋高杯	種類	甕
法 量 (cm)	口径12.9 脚径 8.2 器高 9.7 脚高 5.2	口径14.4 脚径 9.4 器高10.8 脚高 5.5	法 量 (cm)	口 径 12.4 体部最大径 25.0 器 高 29.3
杯 部	口縁部は外反気味にひらき 端部は丸くおさまる。 口縁部と底部は2本の突条 によって区分けされる。 突条直下でや・凹湾したの ら、底部を形成する。外面 は荒いヘラケズリを行なっ ている。 内面はロクロ成形のみ。 脚部貼付の痕跡が残る。 ロクロの回転方向は時計ま わりである。	口縁部は斜めに大きくひら き、端部は丸くおさまる。 口縁部と底部は間隔をおい た2本の突条によって区分 される。 突条は鋭きに欠ける。 外面ヘラケズリは荒い。 ロクロの回転方向は時計回 りである。	口 縁 部	外反する頸部に、凹湾して たつ口縁部をもつ。 口縁端面は下方にのびる。 頸部上下に2本の鋭い断面 三角形の突帯をめぐらし、 各突帯下に波状文を施して いる。波状文は、上からみ て時計まわりに施された ことが明白である。
脚 部	脚高は低く、基部から脚端 へ外反しつつ拡がる。端部 は上方に突出しており縁端 は丸く仕上げられている。 長方形透孔が三方に開く。	脚高は低く、基部から脚端 へ外反しつつ拡がる。端部 は段をもつ。端縁は上下か らなでられて突出する。縁 端はや・鋭角気味である。 外面はかき目調整 長方形透孔が三方に開く。	肩 副 部	肩部の張りはあまり強くな く、体部最大径は中央部よ りや・上にある。 外面は格子状の叩きの後、 かき目調整されている。 内面、肩部に成形の際の指 痕、圧痕が顕著であり、副 部は同心円叩きをすり消し ている。
色 調	青灰色	灰色	底 部	とがり気味の底部、外面は 格子状の叩き、内面は同心 円叩きをすり消している。
胎 上 質	良質1~2%の砂粒を含む。 堅緻	粗2~6%の小石を多く含 む。 堅緻	胎 上 質	良質1~4%の砂粒を若干 含む。 堅緻
備 考	杯部下平及び脚部の外面に 黒灰色のカーボン。 内面は暗灰色のカーボン		備 考	頸部内外にカーボン、 自然釉



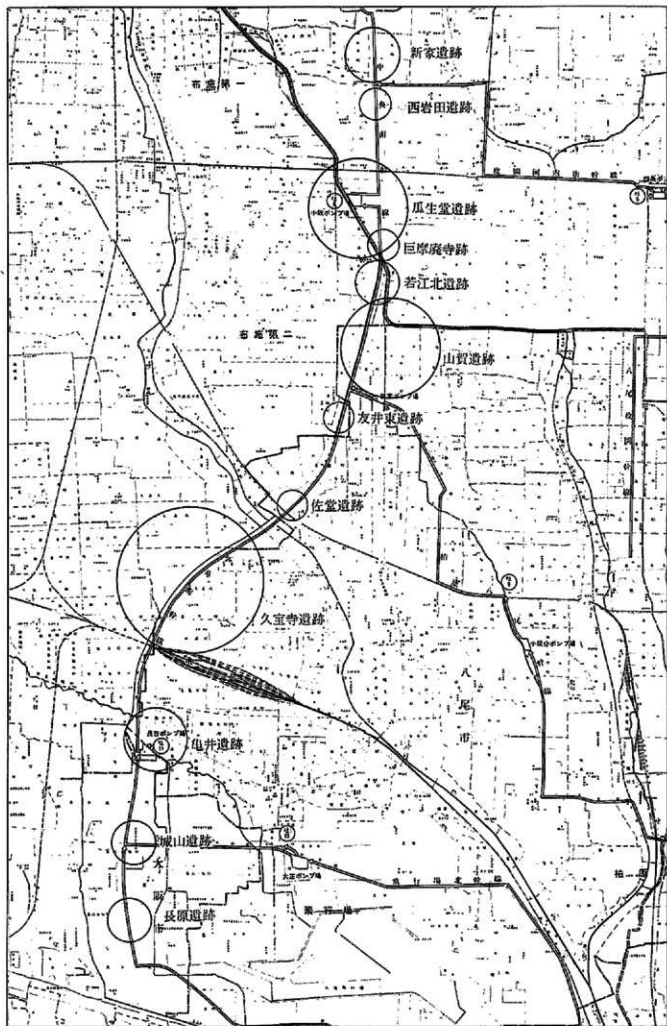




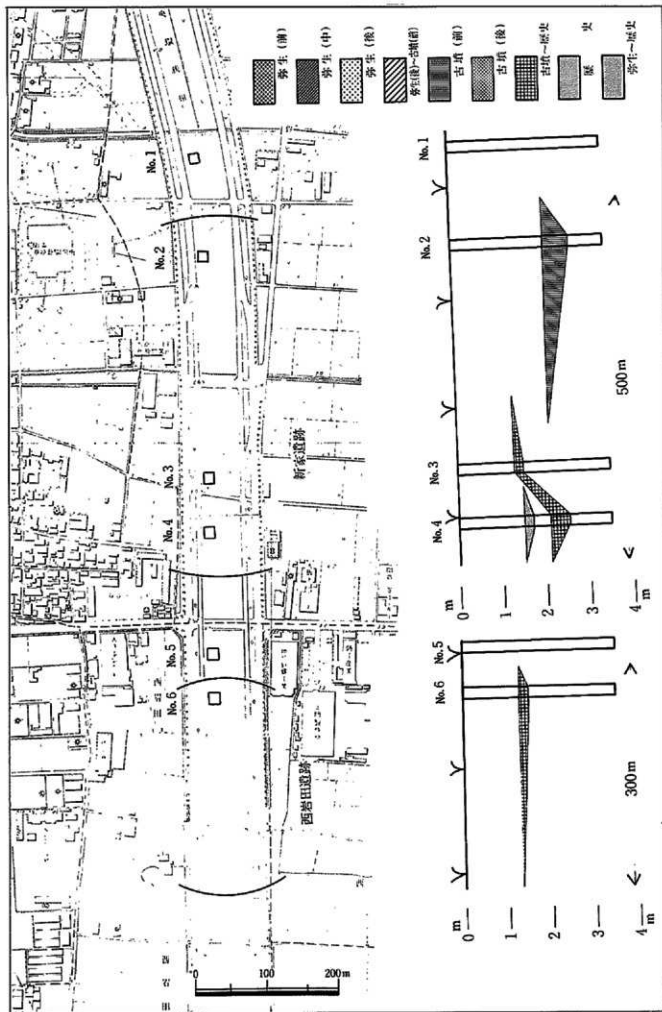




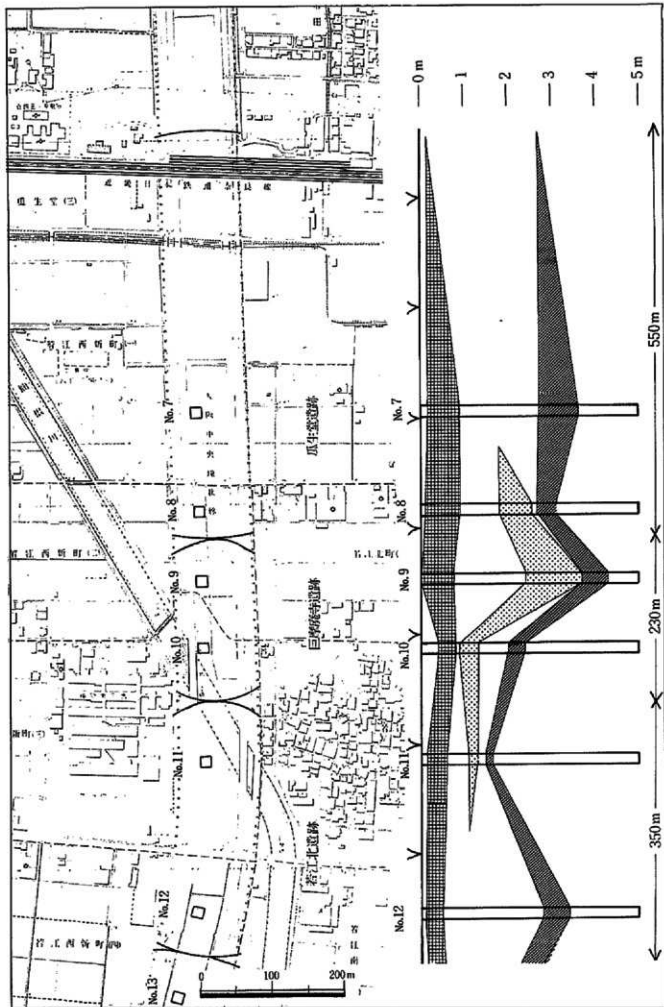
図版六 近畿自動車道予定路線と遺跡の位置



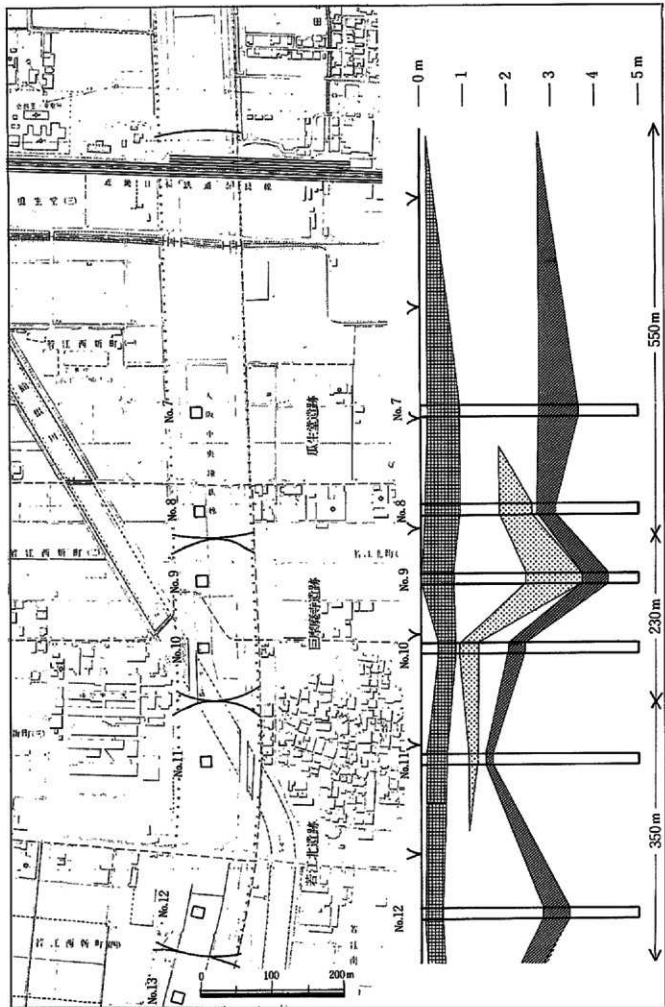
図版七 新家遺跡、西岩田遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

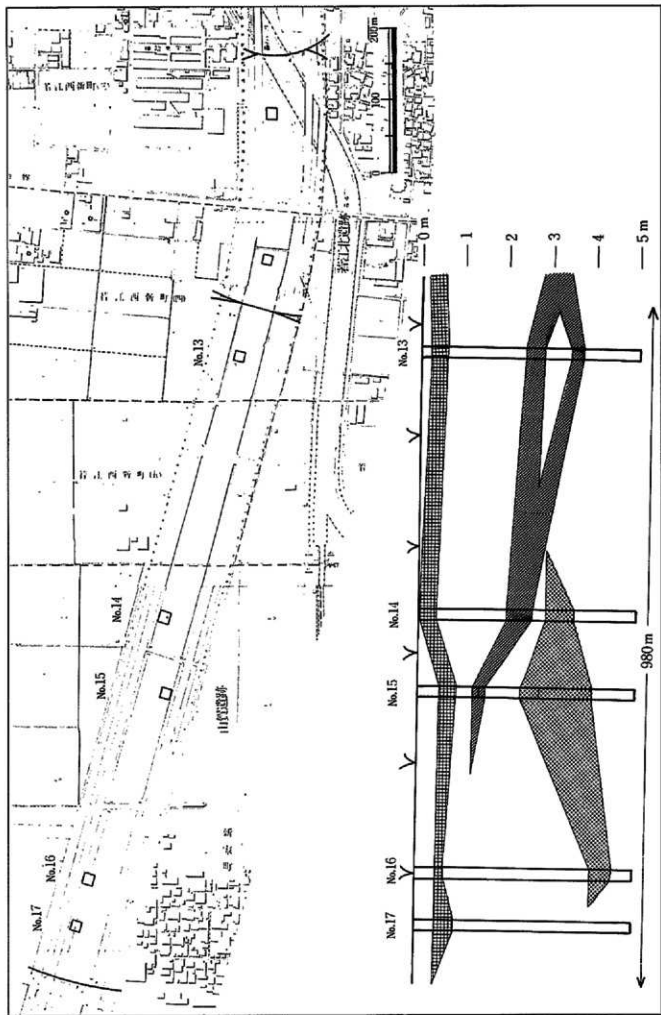


図版八 瓜生堂遺跡、巨摩鹿寺跡、若江北遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

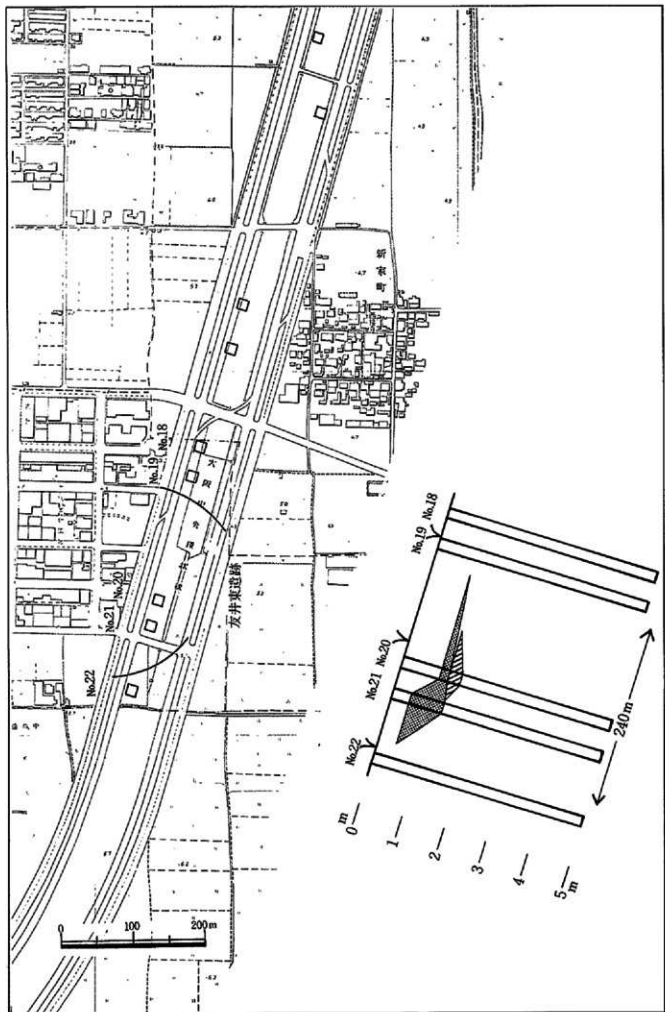


図版八 瓜生堂遺跡、巨摩鹿寺跡、若江北遺跡の範囲及び遺物包含層断面図





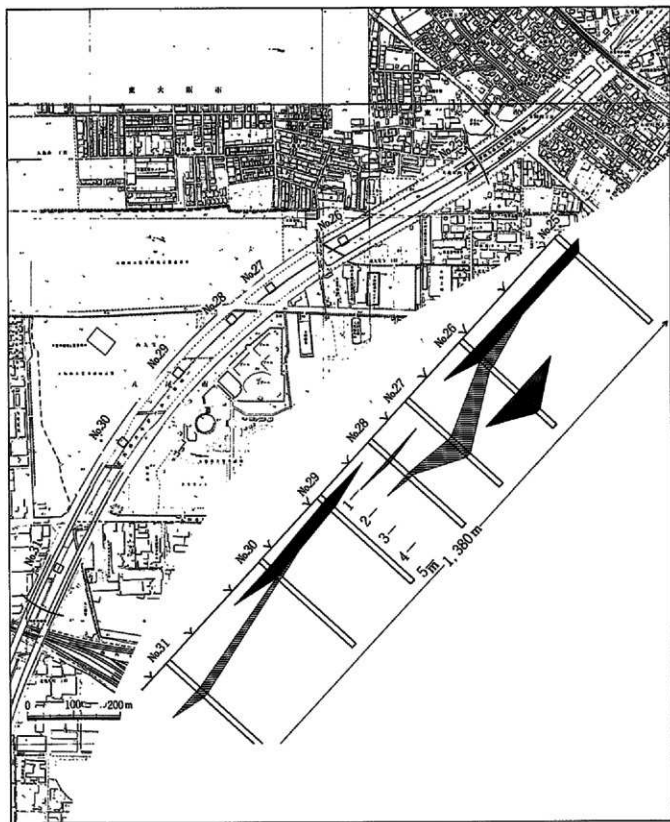
図版十 友井東遺跡の範囲及び遺物包含層断面図



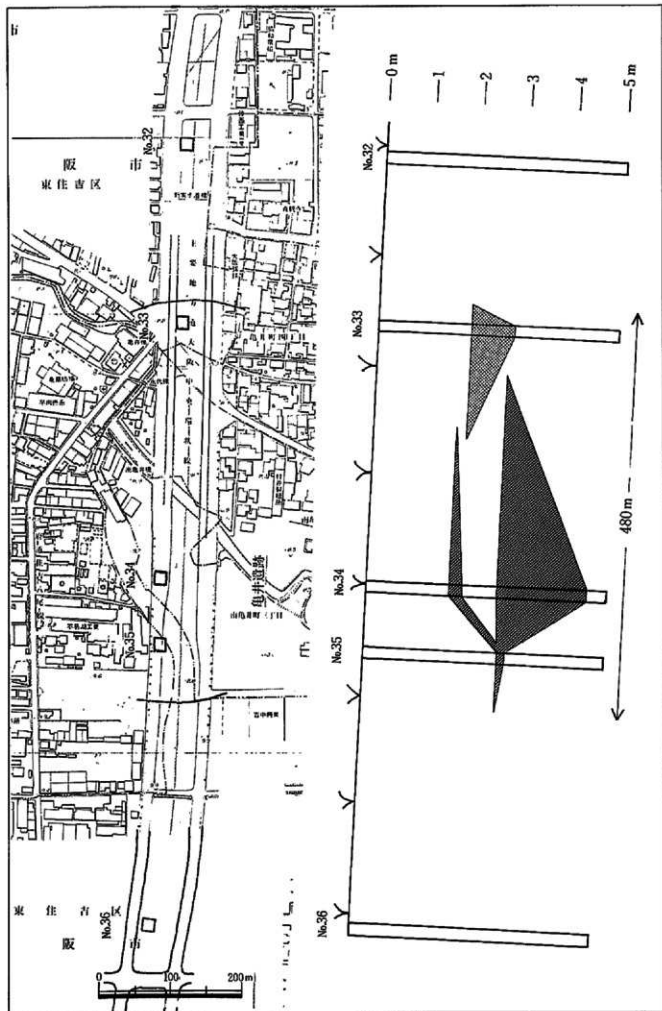
図版十一 佐堂遺跡の範囲及び遺物包含層断面図



図版十二 久宝寺遺跡の範囲及び遺物包含層断面図



図版十三 亀井遺跡の範囲及び遺物包含層断面図



図版十四 城山遺跡、長原遺跡の範囲及び遺物包含層断面図

